
COBALT-SERIES
天と地の者
緑蘿の檻に囚われ
前田珠子
集英社

COBALT-SERIES

天を支える者

# 緑蘿の檻に囚われ

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

天を支える者

# 緑蘿の檻に囚われ

前田珠子

集英社

# 目　次

天を支える者　緑轟（りょくごう）の檻（おり）に囚（とら）われ
緑轟（りょくごう）の檻（おり）に囚（とら）われ……7
あとがき……188



## ガスカール

ナルレイシアの護衛を命じられた青年公爵。クールな性格で、ことナルレイシアに対して手厳しく、口を開けば毒舌ばかり。

## ナルレイシア

「不幸中の幸いの権化」というありがたくない異名を持つ本好き少女。柱神さまを見きわめる「選定者」でもある！

# 物紹介


スカルトード
超絶美形の青年にして、とある柱神さまの縁者でもある。ナルレイシアとは「本の虫同盟」の絆で固く結ばれている。
ウォルセン
良家の子息だが、理由あって家出中。手先の器用さを活かしてなんとか生計を立てている。女装で追っ手をまいているが…？
登場人

イラスト／明咲トウル

# 緑蘿の檻に囚われ



思いがけない成り行きから命の危険に晒されたことも含め、いろいろな意味で過度の緊張状態にあったのだと思う……ほんの一刻ほど前までの自分は。

ところが、そのいくつもの危険要素から——完全にではないが——解放されたということで、確かに自分は気を抜いていたのだ。

と、後日ウォルセン・ディーシア・オルス・マルシアスは振り返る。

だが、この時点での彼には、そんな冷静な判断力はなかった。

なぜと言って、彼はこの時、人生を左右するかも知れない特大の『疫病神』をようやく振り切ることに成功したばかりだったからである。

半ば強引に押しかけてきた、蜂蜜色の少女の姿をしたその疫病神のせいで、朝からそろそろ日も傾きかけるこの時刻まで、さんざんな思いを味わわされた。

……まあ、刺客の狙いが自分であることを考えれば、少女のほうこそが巻き添えになった被害者のはずなのだが、明らかに振り回されたのは自分のほうだと思えるあたり、素直に彼女に詫びる気にはなれないのだ。

（勝手にひとの荷物、どっかに飛ばすし。ひとのこと橋の上から川に引きずりこむし。そのくせ自分は溺れて意識なくすし。ようやく岸に引きずりあげたら足傷めてて、抱き上げて運ぶ羽目になったし……！）

全くもってろくでもない。

逃げ出せた自分を「よくやった」と褒めてやりたいぐらいだ。

と、そこまで考えて、ウォルセンはがっくりと肩を落とした。

（それどころじゃないじゃないか、俺）

冷静に考えてみれば、己が置かれている現状は、とんでもなく危険なものだ。

決死の覚悟で家出を決行して以来、ウォルセンはずっと目立たないように振る舞ってきた。

自分のことを捜している勢力が三つ存在することを知っているからこそ、細心の注意を重ねて息を潜めて身を隠してきたのだ。

危険な気配を感じると同時に住む場所を変え、名さえ変え――一年の間に、そう……もう四度目にもなる。

（殺す気満々だったってことは……今回はラルクティアが一番乗りだったってことか……）

まだしもましか――咄嗟にそう思ったことに、つい苦笑が洩れた。

命を狙われるのが、まだしもなどと感じるとは……自分の置かれた状況のロクでもなさにう

んざりさせられる。

ただ、三つの存在の内、どこに狙われた時が一番逃れやすいかと問われれば、今回の……ラルクティア一派であるのだから、この感覚はまんざら間違ったものでもないのだ。

（本当に厄介なのは……）

意識がそちらに向かいそうになるのを、ウォルセンは無理矢理振り切った。

三派中で最も対応しやすいとは言っても、相手の殺意は本物であり、決して気を抜ける相手ではなく、今の状況は気を抜いていいそれではないのだ。

（この足で街を出るのは決定事項として……正門は絶対にあちらに抑えられてるはずだよな。だったら、抜け道は……北、か？）

思うと同時に、ウォルセンの脳裏にこの街――エアランの詳細な地図と、各地区に関する情報が浮かび上がった。

エアランの北の外れには、違法に住み着いた者たちの集落がある。法に背いた者たちが集う場所には、法を頼れない者の助けとなるさまざまなものが集っている。

逆もまた、言えることだが――。

（ラルクティア一派はある意味正統派……というか、融通が利かない。あそこに手を回すまでのことはしてないだろう……多分）

だから、きっと大丈夫だ――。

にしても、まったくの身ひとつで『引っ越す』となると前途は多難だ。

もう少しは時間的猶予があると思っていたため、件の住人と接触し始めて間もないというのが現状なのだ。これから次第に親しくなり、多少の無理なら聞いてもらえる関係を築いていこうと思っていた矢先のこのトラブル。

しかし、起こってしまったことは仕方がない。

顔なじみになった男の顔を思い出しながら、せめて今着ている服を代償に、こっそり街を出る用意を整えて貰わなければならない――。

今身につけているのは、ダカール商会で用意されたものだから、結構な値で取り引きされるものに違いないが、問題は「それ」しか代価とするものを持たない自分の現状である。そこに付け入れられた場合、損としかならない取り引きを強要されかねない。

それは、この切迫した状況では遠慮したい。

（……仕方ない。気は進まないけど、精霊たちに相手の弱みを探ってもらって、それを交渉の材料に使わせてもらおうか……）

早い話が脅迫である。

以前のウォルセンなら想像もしなかった手段ではあるが、ここ一年というもの、気を抜いた

が最後、いつ命を落としてもおかしくない日々を送ってきただけに、必要とあれば手段を選ばないだけのしたたかさを、彼はしっかり身の内に育んでいた。

……擦れた、とも言う。

（じゃあ、実際に会うより先に、少しでも弱みを摑めた方がいいよね。となると、噂好きな風霊に頼むか……ほんとはイヤなんだけどな……）

心底、イヤなのだけれど——こんな、精霊たちが自分に向けてくれる好意に甘える形で、通常では知り得ない情報を得るような……卑怯な真似は。

だが、ウォルセンにはここで死ぬわけにはいかない理由がある。

正確に言うなら、決して傷つくわけにはいかない理由が。

そのためなら、どれほど卑怯な真似でも自分は進んでやるだろう——違えるわけにはいかない、たったひとつの約束を果たすためになら。

（アッシュ……）

今は遠い空の下にいる、かけがえのない友のことを思いながら、ウォルセンは風霊に汚らわしい願いを口にしようとし——。

その瞬間に、あることに気づき、愕然とした。

精霊の気配が……生まれてこの方、ある時期を除き、常に身近に感じつづけてきた精霊たち

の気配が、今、一切感じられないということに！
（なんだ、どういうことだ!?）
慌てて周囲を見回した時、ようやく異常に気づいた。
人目を避けて、エアランの北を目指して歩いていた自分――とはいえ、日は西に大きく傾いている時刻だ。人の気配が……なさ過ぎる！
人間の気配も、精霊たちの気配もない、――完全に『通常』の空間から隔絶された世界。
これは――。
（やられた！）
と、思った。
先手を打たれた。完全に『取り込まれて』しまった！
そして、こちらがそうと知覚するのを待っていたかのようなタイミングで、残酷な……穏やかな声がかけられた。
「ウォルセン・ディーシア・オルス・マルシアス？」
問いかけの形を取った、確認の呼びかけ――。
声のしたほうを振り返ったウォルセンは、黒髪の悪魔の姿を見いだした。
人間も、精霊の存在さえも駆逐した特殊な空白の世界に、ただふたりきりで対峙して――そ

こで悪魔はにこりと笑った。

「帰りましょう？　御当主は心配なさってますよ？」

告げられた言葉に、ウォルセンは世界が揺らぐのを感じた。

逃げられたのだと一度は信じた。

けれど、それは仮初めの……錯覚に過ぎなかったのだ。

手足に絡みついてくる……これは蔦か、鎖か。

いや、どちらも変わりはしない。

蔦であれ鎖であれ、これが我が身を縛ることに違いはないのだから。

強固な檻に否応なく繋がれる——その絶望にウォルセンは目を閉じた。

未来に光はないと思えた。

# 1

ナルレイシア・フォイリリル・ダカールは、現在怒り心頭に発していた。

麗しくも愛らしい口元から洩れ聞こえるのは、他人さまには聞かせられない壮絶な歯ぎしりの音――その蜂蜜色の双眸はぎらぎらと、獲物を狙う肉食獣のそれのごとく凶悪な光を放っていた。

……彼女には、望まずして押しつけられ……もとい、与えられた務めがあった。

虹神七神によって作り上げられたこの世界の『天と地』の狭間――『空』を支える柱たる存在……生ける神たる『柱神』を見極めるという大役が。

正確に言えば、柱神を……もっと正確に言うなら、そうなる資質を持つ人間を選び出すのは彼女ではなく、創世七神たる虹神が生み出したと伝えられる『神宝』だ。

ナルレイシアの役目は、その神宝が見いだした『資質を持つ候補』の中から、周囲の思惑を排除した上で、真実神宝が選んだ人物を見極めることなのだ。

それが、選定者と呼ばれる者が背負うものだ。
そのことに対しては、ナルレイシアに否やはない。
というか、この役目は拒否権なしの神様から押しつけられるものであるため、抗いようがないとも言えるものだからなのだが。
それでも、いま、ナルレイシアは猛烈に怒っていた。
理由は簡潔。
本に埋もれて暮らせたら、それこそが楽園の日々だと信じて疑わない彼女に降って湧いた災難……いやいや、課せられた試練……これも違う……ああ、でもそう表現するのが一番的確に思える状況にあって。
ありがたくもない神々から課せられた宿題を、なんとかかんとか達成できそうだと思った矢先に、『宿題』そのものに逃げ出されてしまったのだ！
その『宿題』の別名を『新柱神候補』という。
見つけたのは偶然とは言え、食らいついて縋り付いて逃すものかと頑張った相手に、よりにもよって確保したと確信した次の瞬間に……逃げられたのだ。
（なにがなんでも捕まえる！）
ナルレイシアがそう固く決意し、握り拳を固めたのは無理からぬことであった。

（さっさとお役目果たさないといつまでたっても本まみれの日々送れないしー）

……決意を固めた理由は、お世辞にも世のため人のため、とは言えない我欲に満ちたものであったのだけれど。

目指すべきは、きらきらと輝きながら、彼――ウォルセンの周囲に漂っていた淡い金と緑の入り交じった光の粒の残光だ。

宿から迎えに来て貰ったスカルトードに抱きかかえられた格好のまま、ナルレイシアはじいっと目をこらした。

因みに、ナルレイシアの視界を遮らないよう、長身のスカルトードの腕の肘から手首の間に座らされた形であるため、周囲からは熱い眼差しが投げかけられていたりする。見た目だけで言えば、金髪に黄玉の双眸の文句なしの美少女が、金髪に灰緑の瞳を持つ人外としか思えない美貌の青年に『お人形抱っこ』されているのだから、無理からぬ反応と言えるかもしれない。

だが、当事者としては、別段周囲に余計な混乱や眼福を振りまくつもりなどないのだ。

ウォルセンとの逃避行中に、足の爪を割るなどという怪我さえ負わなければ、ナルレイシア

は自分の足で彼を捜す気満々だった。

また、早急にウォルセンを捜す必要がなかったら、抱きかかえられての追跡行に踏み出すこともなかったろう。

しかし、しかしだ。

すべての事象は彼女に迅速な行動を求めていたのだ。

（会って初っぱなに矢が飛んできたときは、わたしが狙われたに違いないって思ったけど……）

その後の、ウォルセンの態度を思い返すだに、そうとは言い切れない状況であることに気がついた。

明らかに逃げるための情報を頭にたたき込んでいた彼――あれはきっと、狙われることを常とする者の、そしてこれまで逃げおおせてきた者ならではの行動だった。

そして、一度は――ナルレイシアが強引に橋の上から川に飛び込んだせいで、ふたりとも濡れ鼠になったせいなのだが――着替えのある自分の部屋に戻ることを決めながら、途中で態度を豹変させたのは……恐らくはそこに追っ手の影を感じたからに違いない。

自分を放り出して別行動を取ろうとしたウォルセンを何とか引き留められたのは、着替えと休息が取れる場所の提供を申し出たおかげだ。ナルレイシアはこの時ほど、実家が手広く商い

を行っていることを感謝したことはない。
そう、彼女の父リンレイドが社主を務めるダカール商会の支店に、ふたりは逃げ込んだのである。
この時、すでに陽は中天を過ぎていた。
朝から走りっぱなしで疲れていたことや、宿泊先である白鷺館から、連れが迎えに来てくれたことで、正直なところ気が抜けていたのだと思う。
確かに油断した——自分が悪い。
そうは、思うけれど！
「お世話になりましたの一言ぐらい……」
と、思わずにいられない。
そんなナルレイシアに、朝からこれまでの事情を聞いたばかりのアゼルフィアが、考えこむように首を傾げた。
「……なんだか、お世話になったというか、迷惑をかけたのは一方的にナルレイシアさんの方のような……」
……何気なく……かなり辛辣なことを言う少女である。
しかし、ナルレイシアは気にしない——。

「だから！　一言ぐらいお礼を言わせてくれてもよさそうなものじゃない！　せっかく落ち着いたんだから……」

これに対するのは、彼女を抱きかかえたまま、優雅な足取りを崩さない青年だった。

「落ち着いたから、姿を消したんでしょう。ひとまずヴィル・ダカールが危険に巻き込まれることは回避できたと判断したのでしょうね。まあ……そのままつきあっていたら、絶対に離れてくれないと思ったとか……」

これにはぐっと詰まってしまったナルレイシアである。

（確かに迷惑がられてるの承知でしがみついてたけど……）

あれは致し方のない仕儀だったのだ、と是非とも主張したいところである。

なにしろウォルセンは、ほんの先頃転がり込んできた神宝『翠唱子』の半身かも知れない……つまりは新たな柱神候補だったのだ。

しかも、こちらの話を聞いてくれるつもりが皆無なのは明白で、到底時間をかけて親しくなるとか絆を深めるとか懐に入り込むとか、そういう悠長な手段に訴えている余裕はなかったのだ。

だから、押しの一手で迫った。

結果は――。

『折り入ってお話ししたいことがあるので、少しだけお時間いただけませんか？』

とのナルレイシアの言葉に、即座に『あげません！』と返ってきたわけなのだけれど。

それでも諦めなかったナルレイシアの根性は一応実を結んだかに見えたわけだが……本当に甘かった。

（ここまで引っ張ってきて、逃げられるだなんて……）

なぜ、店員たちに徹底的に目を光らせておくように指示しておかなかったのか。

（そうしたら、間違ってもこんなことにはならなかったのに――）

ナルレイシアの心は後悔でいっぱいだった。

それは、密かに姿を隠した、事情ありげな柱神候補の青年のことが心配だったから、というのも勿論あったのだが――それだけでは、なかった。

「それで、ヴィル・ダカール？　分かれ道になってますが、どちらに進めばいいのでしょう？」

ナルレイシアを軽々と抱き上げたまま、スカルトードが涼しい顔と声で問いかけてきた。

そのとなりに、ぴったりとアゼルフィアがついて来ている。

そうして――周囲から向けられる、好奇、羨望、嫉妬等々を山ほど孕んだとげとげしい人々の視線。

と――。

ナルレイシアたち三人にくっついて移動する不特定多数の人々。

（ああ、失敗しちゃったわ！）

胸中で盛大に嘆くナルレイシアだった。

スカルトードの人外の美貌の脅威はそれなりにわかっているつもりであった彼女はしかし、そこに付加価値がついた場合に生じる突発的現象にまでは頭が働いていなかった。

つまり、傍目に大変目立つスカルトードがひとりきりでなく、やはりとんでもなく人目を引く自分を――このあたりに関しては自覚はないのだが――人形よろしく抱き上げた格好で街中を歩き回った結果、いかに衆目を集めてしまうのか、ということにだ。

（ウォルセンさんはこっそり隠れて逃げようとしてるのに、それを追いかけるわたしたちがめいっぱい目立っちゃってどうするのよ!?　というか、スカーさん、目立ちすぎ！　見とれてお供になったひとたち、こんなに大量生産しちゃってどうするつもりなのーっ!?）

彼女たちの背後には、スカルトードの美貌に骨抜きにされたエアランの住人たちによる行列ができていた……実のところは、スカルトードと抱き上げられたナルレイシアという、一幅の絵にも似た取り合わせの妙に魂を奪われてしまった一団だったのだが、彼女に元凶の片割れである自覚はない。

だものだから、スカルトードが、いつまでも問いに答えてくれない彼女の顔を覗きこんできたとき、思わず（この元凶！）という苛立ちのまま、両手で彼の両頬を打ってしまった。

「ヴィ、ヴィル・ダカール!?」

突然のことに、驚愕しきりな声を上げたスカルトードに、彼に罪はないとはわかりつつも、つい咎めるような目と言葉を向けずにおれなかったのは……致し方ないことだった。

「ううぅぅ……迎えに来て下さって、しかも自力で歩けないわたしを抱きかかえてでも、協力していただいて……そこのところは本当に、本っ当っに感謝してるんですけどっ！　でもでも、スカーさん、目立ちすぎ！　せめてガスカールなら、ここまで目立たなかったはずなのにぃぃぃ！」

目立って恥ずかしいのはこの際脇に置いておくとしても、追跡者である自分たちがここまで目立ってしまっては、意味がない。

相手はひっそりこっそり逃げ出した相手なのだ。

追う立場の方が目立ちまくって、どうなるというのか。

「うー、最悪」

唇を噛みしめるナルレイシアに、さすがに多少の自覚はあるらしい青年が苦笑して答えた。

「目立つという件に関してはお詫びするしかありませんが……今回の件に関しては、カールは

使えませんでしたよ。ヴィル・ダカール、貴女が見つけた相手は、少々カールとは相性の悪い存在でしたからね」

意味深長なスカルトードの言葉に、ナルレイシアはすぐに問いかけようとしたのだが——同時に向けられたスカルトードの深い色をたたえた眼差しに、それは遮られた。

（見つけた相手……？　カールと相性が悪い……？）

相変わらず意味が不明だ。

だが、そこにある含みを感じ取れないわけではなかった。

（ウォルセンさんが……ガスカールと……？）

なぜ、という思いとともに、疑問符が脳裏を埋め尽くす。

ガスカールの事情はある程度ファティ・リンシャやアマンシールという、彼の養い親的立場にあるふたりから聞いて知っていた。

前の王家エルスース家直系の血を受け継いだ唯一の家系であるエルスカーネ公爵家に生まれた、エルスースの化身を思わせる黒髪と紫水晶の双眸を持つ青年——。

その色彩ゆえに、現王家であるファラスース家に心酔する者たちからは危険視され、逆に現王家に反発する勢力からはエルスースの再来と見なされ期待され——それゆえに生まれながらに危うい拮抗の中に晒され続けてきたひとであることを。

そのバランスが崩されたのは、彼がまだ十にも満たぬころのこと。
どちらの勢力によるものかは不明ながら、彼を狙ったと思われる騒ぎによって、彼ではなくその両親が命を落としたのだ。
詳しいところを、ナルレイシアは知らない。
ガスカールは語ろうとしないし、事情に通じる関係者たちも、詳しくは教えてくれなかったからだ。
それでも、その事実がどれだけ彼の心に傷を残したのかは……実感は無理だけれど、想像することはできる。我が身に重ねて想像するだけで、それでどれほど重く痛い出来事だったのかわかる気さえする。
「ふざけるな！」
と、きっと本人には怒鳴りつけられるだろうけれど。
……だからこそ、絶対に、そこに踏み込むような真似はできないと思ってしまうのだけれど……でも。
（スカーさんは、違う）
自分より、ずっとガスカールの近くに位置するひとだ。
そんな彼が、自分の目立ちすぎる容姿のもたらす弊害をわかった上で、自分の元へ駆けつけ

た――外見的にまだしも目立たないガスカールに任せるのではなく。

（それって、つまり……絶対にウォルセンさんとガスカールを会わせたくなかったから、ってことになるわよね……？　単にふたりを会わせたくなかったか、それともあわせるわけにはいかなかったのか……）

それは、いったい、なぜ……？

その疑問が浮かんだ瞬間だった――まるで、それを見計らったかのように、スカルトードが声をかけてきた。

「ヴィル・ダカール、説明は後ほど。今は集中してください……それとも、問題の彼は『翠唱子』の半身候補ですらなかったのですか？」

「いえ！　そんなことは……！」

ないです、と言いかけて、あることに気づいてナルレイシアは唇を噛みしめた。

スカルトードの言いようが、「神宝の半身でなければ気にかける必要はない」とでも言っているように感じられたからだ。

（なにか……わたしの知らないところに根深い事情が隠されている、とか……？）

だとしたら、それは何なのだろう？

思ったが、どう考えてもこの場で尋ねたところで答えてはもらえなさそうな様子に、ナルレ

イシアは心を整理した。

（知りたいことは色々あるけど、ひとまず優先順位を決めなくちゃ。ウォルセンさんが翠唱子の半身候補だってことは、まあ確実というか本命だと思ってるわけで……だったらここで逃しちゃったら、また見つけるのに非っ常に苦労させられそうなのは目に見えているわけで……ああ、もういい。ガスカールと微妙な関係にあるだとかなんだとか、とにかく確保しちゃってから考えればいいのよね、実際のところ！）

すこーんと突き抜けた決断を下し、ナルレイシアはきっと顔を上げた。

「そうですね、スカーさんのおっしゃる通り、いまは確保が最優先です！　事情もへったくれも後で聞き出せばいいんですよね！　ナルレイシア・フォイリリル・ダカール――ウォルセンさん捕獲に集中しますっっ！」

……確保だとか捕獲だとか――かなり不穏な言葉を口にするナルレイシアに対して、『見届け役』たるアゼルフィアがなにか言いたげな複雑そうな視線を向けてきたのだが……これには気づかないナルレイシアだった。

（そうよ、とにかくひっ捕まえて、懇切丁寧に事情を説明して、それで翠唱子に触れてもらって……それでもし、本当に神宝の半身だったら……）

柱神として生まれ変わることを、なにがなんでも説得しなければならないのだから。

それ、は――ナルレイシアの望みを果たすためだけのものではない。

ナルレイシアは確かに一刻も早く『選定者』などという役目からは解放されたいと希っている。だから、神宝が選んだ相手が見つかったら、すんなりあっさり素直にその運命を受け入れて欲しいと――そうすれば責務が確実に減るわけだから――願う訳なのだけれど、本当のところは違う。

（見つけて、もし本当だったら……説得しないと）

翠唱子の半身であるのなら、その運命を受け入れるように――。

でなければ――。

ぞくり、と胸の内を鋼の刃でなでられたような悪寒を覚える。

それは、選定者たるナルレイシアに、ディエーンの当代柱神であるアマンシールから告げられた内容故の感覚だった。

（一刻も早く捕まえて、うんとうなずかせないと――）

その先に待つ未来など、どうあっても目にしたくはなくて、ナルレイシアはきり、と唇を噛みしめた。

「全力で追いかけます！　もう、恨まれてもいいです！　ということで、スカーさんもアゼルフィアもこの際一蓮托生ってことで一緒に恨まれてください！」

はっきりきっぱり言い切った彼女に、出会って間もない――当然事情も詳しくない――少女が不満の声を上げた。

「それってどういうことなんですか!?」

「後でまとめて説明するから！　いまは黙って！　ええっとー、スカーさん、ご要望通り追いかけましょう。ここの角、右です」

緑がかった金髪の青年は、その声音（こわね）に彼女の本気を感じ取ったのだろうか――「右、だね」と満足そうに笑った。

……軌跡を追うのは、難しい事ではなかった。

追って――追って。

ただ、思いもかけぬ事態にぶつかった、だけだ――。

# 2

それ、はあまりにも突然のことで、ナルレイシアはなにが起こったのか理解することができなかった。

（嘘……）

息を呑み、体を強ばらせた彼女に、スカルトードが怪訝そうな視線を投げてくる。

「ヴィル・ダカール？」

どうしました――？

尋ねられても、すぐには答えられなかった。

（だって……あり得ない。こんなことって……）

あれほどはっきりと残っていたウォルセンの光の軌跡が、突然消失するだなんて！

「そんな……なんで……」

「ナルレイシアさん、どうしたんですか？　光の粒は、どちらに向かっているんです？」

ちょうどそこが三叉路だったせいか、アゼルフィアがそう尋ねてきた。
「……わからない」
呆然としたまま、ナルレイシアは答えた――他に答えようがなかったのだ。
「わからない？　もしかして複数の軌跡があるわけですか？　まさか、こちらの追跡に気づいて彼が目くらましを仕掛けた、と？　彼はヴィル・ダカールが異能の光を感知できることを知っているのですか？」
スカルトードの問いに、ナルレイシアは（ああ、そういう可能性もあるんだわ、さすがスカーさん）などと思いながら、ウォルセンとのやりとりを思い出す。
精霊にまつわる話だとか、自分が神殿絡みの役目を負っていることなどは確かに会話に出した。
が、異能者を見分けるこの『視覚』については――。
（言って……ない）
「知らないはずです。だから、ウォルセンさんがこちらの目を眩ませるために手間暇かけるというのはないと思います……いえ、そうとも言い切れないのかしら!?　光の粒が……ぷっつりここで途切れてしまってるんです」
それは、これ以上の追跡が不可能だということだ。

なぜこのようなことが起こったのかはわからないが、悔しいにもほどがあるというもの。

しかし、彼女のこの言葉に、スカルトードがはっと息を呑んだ——どうしたのかとその顔を見れば、その灰緑の双眸には険しい光が宿っていた。

「スカーさん？」

彼がなにかを知っているのは間違いないように思えた。

そんな彼女の思いを感じたのだろう、スカルトードはふう、と息を洩らした。

「……先ほど、少しの時間でしたが、精霊たちがあなたたちの行方を見失いました。ファティ・リンシャから頼まれた精霊たちが、です。ファティ・リンシャは、結界術師が絡んでいる可能性が高いとおっしゃってました。ウォルセンという青年の気配が、あなたにもわからないほどに途絶えたというのなら……その結界術師が関与していると考えたほうが自然かと」

淡々と告げられる内容は、しかしとんでもないことだった。

ナルレイシアが思わず「げ」と淑女らしからぬ声を上げる程度には。

「結界術師！」

ナルレイシアにとって、はっきりきっぱり悪印象しか残っていない存在である。

それというのも一年ほど前、ひとりめの柱神を見極める役目の最中に、彼女はひとりの結界術師のせいで大変な目にあわされた過去があるからだ。

攫われた先の屋敷から、脱出すべく動いたところを、その結界術師に見つけられ——結果、意識を奪われたまま眠り続ける羽目に陥ったのだ。おかげで殺されそうにはなるは冤罪を着せられそうになるは、さんざんだった。

だもので、その言葉を聞いた瞬間、ナルレイシアの顔が盛大に歪んだのは致し方のないことだった。

しかし、ここで過去の忌まわしい記憶に浸っている場合ではないと、彼女はすぐに意識を切り替えた。

（結界術師が関わっているとなると……その結界でウォルセンさんが包まれたってこと、よね？　本来、結界術師というのは、邪気や瘴気を封じたり、護りの力をある場所や物に固定する能力者だって聞いた覚えがあるから……）

今回関わっている——かもしれない——結界術師が、悪しき目的でその力を揮っているとは限らない。

命を狙われているウォルセンを守るために、その身を保護したという可能性は否定できない……が。

なにかが、引っかかる。

「……逃げている最中、ウォルセンさんは味方がいるようには見えなかったんですよね……ま

あ、あのひとに知られないように見守っていたという線も考えられなくはないけど……」

「それでも、その結界術師が本気でその青年を守るつもりなら、精霊の動きを封じるのはおかしいでしょう。逃げるにあたって、精霊たちの協力は、彼にとっても大きな助けとなったでしょうからね」

スカルトードも似たようなことを考えたのだろう。

そうして、彼はウォルセンにとって、その結界術師が好意的な立場にはない——と結論を出したのだ。

ナルレイシアも同感だった。

しかし、それはウォルセンの身柄が、彼にとって好ましくない相手に捕らえられたということを意味するわけで……。

(どうしよう……っっ!?)

彼女は心底困り果てた。

例の『きらきら』を追う以外、ウォルセンの行方を辿る方法を持たないからだ。

「うーん」

と、考え込んだナルレイシアに、スカルトードがひとつの策を提示した。

「ヴィル・ダカール、諦めるのはまだ早いでしょう。翠唱子の力を借りてはいかがでしょう?

彼は直接触れたわけでもないというのに、翠唱子を変化させたのでしょう？　すでに両者の間には何らかの繋がりができていてもおかしくはありません。いかに結界術師であろうと、神宝と半身の絆をも断ち切ることができるとは思えない」

確かにそれは妙案だった。

しかし、ナルレイシアはその案にこの場で飛びつくことはしなかった――というより、できなかったのだ。

絶望的な気分で、彼女は答えた。

「……持ってきてないんです」

「なんですって!?」

「どうしてっ!?」

スカルトードとアゼルフィアの悲痛な問いかけに、ナルレイシアは叫ぶように答えていた。

「だってっっ！　落としたら取り返しがつかないじゃない！」

初夏とは思えぬ冷たい風が、三人の間を吹き抜けていった――。

（ヴィル・ダカール……あなたというひとは……）

くらくらするものを覚えながら、スカルトードは天を仰いだ。

「翠唱子が転がりこ……いえ、見つかった時点で、いつ候補者が現れるかもしれないというのに……また、なぜ宿に置いてくるなどという真似を……」

この台詞は正確ではない。

スカルトードはナルレイシアから、翠唱子の半身にして新たな柱神の候補となる人物が見つかったことを、昨日の時点で聞いていた。

それがなにか事情を抱えた青年であるらしいことも——それゆえに、見つけたときは彼が女装していたこともだ。

見届け役であるアゼルフィアにショックを与えないために、今朝ひとりでその青年に会いに出かけたことも——神宝翠唱子にひとかたならぬ思い入れのある少女にとって、その半身が女装した青年だというのは、それなりに衝撃を覚える事態だと思うのだ——わかってはいるが、だからといって、まさか神宝を宿に残していたとは思ってもみなかったのだ。

しかも、その理由というのが「落としたら——」だとは。

「あなたはそこまで粗忽者なんですか？」

呆れを隠せぬ口調になってしまっても仕方ないではないか。

「……スカーさん。わたしは別に粗忽者じゃないと思ってます……でも、わたしのありがたくない異名を思い出してください」

不本意、と顔に書いて少女が応じた。

（ああ、確か……）

不幸中の幸いの権化――だったか。

「やっぱり粗忽者だと思われそうでイヤなんですけど……実はわたしは、外に出かけると必ずといっていいほど何かをなくすか壊すかしてしまうんです」

ますます粗忽者――あるいは乱暴者と思われるような内容を口にしながら、ナルレイシアはため息混じりにかぶりを振った。

「幼いころから、耳飾りは必ず片方がなくなるし、首飾りの鎖は切れるし、髪飾りは消えるし……手袋の下にはめていた指輪がなくなっていたときには、さすがにどうかと思いました」

これは相当なうっかりさんだ……と思いかけていたスカルトードは、最後の一例に「はあ？」と声を上げた。

「外出中、一度も手袋をはずさなかったのに、帰宅したときには指輪が消えていたんです」

「……それは、手袋を外すときに一緒に抜けてしまった、とかいうのではなくて……？」

恐る恐るといった様子で、アゼルフィアが尋ねると、金の少女は苦笑とともに肩をすくめ

た。

「真っ先に手袋をひっくり返したけど、なかったの。あんまりひどいものだから、狂言なんじゃないかって疑われたこともあって……。そのとき、お師匠の知り合いの神官さまに視てもらったんだけど、わたしの失せ物は大禍を滅ずるための身代わりなんだって告げられて……何しろその時点でわたし三回は死にかけてたものだから、みんな納得はしてくれたんだけどねえ……。でも、自分の持ち物を身代わりにされちゃかなわないって、誰も持ち物をわたしに触らせてくれなくなったのよねえ。あれは……少し切なかったわ」

さらりと語られた内容は、口調ほどに軽くはなかった。

狂言だと疑われたときも、事情が明らかになったときも、きっと『少し切ない』どころではなかっただろうに――と思うと、スカルトードはナルレイシアの健気さが愛しくなった。

とは言っても、翠唱子の件に関しては話が別だ。

「そういうことなら……と言って差し上げたいところですがね、ヴィル・ダカール。普通の装飾品と、神宝とを同じに並べるのはどうかと思いますよ。現にロスタロイドに着いたばかりの夜、酔漢にぶつかられて貴女が昏倒したときも、いくつか荷物は盗まれたものの、証の硬貨は無事だったではありませんか。それどころか『黄昏の黄金』までたぐり寄せて……」

「たぐり寄せてって……あれは、酔漢を装った男が神宝を紛れ込ませただけじゃないですか」

反論してくる少女に、いいえ、とスカルトードはかぶりをふった。
「それこそが神々の導きではありませんか。今回の翠唱子にしても、偶然舞い込んできましたでしょう？　つまり、『黄昏の黄金』も『翠唱子』も、選定者たるあなたに引き寄せられるのです。半身の手に渡る以外で、あなたから離れるとは思えませんね」
だからあなたは翠唱子を持ってくるべきだったのです――と告げたのだが、ナルレイシアは納得できないようだった。
「そうはいっても、スカーさん。わたし、今朝から全力疾走した挙げ句に矢を射かけられて逃げ出して、何度も転びそうになった挙げ句、ついには橋から川に飛び込んだんですよ!?　それでも絶対なくさなかっただなんて、どうしたって考えられません。さっき、事務所の奥で着替えながら、しみじみ持って来なくてよかったって思ってたぐらいですもん」
大筋についてはファティ・リンシャに聞いていたことだったが、改めて聞かされるととんでもない半日である。
だが、それでもその最中に翠唱子が失われることはなかっただろうと確信している自分がおり、スカルトードは素直にそう口にした。
「そういうことならなおさら……」
両者譲らぬ水掛け論となりかけていた会話に、このとき躊躇いがちな声がかかった。

「あ、あのぉ……」

明るい緑の目をぱしぱしと瞬かせながら、割り込んできたのは赤みの強い栗色の巻き毛の少女だった。

「わたし、宿を出てくるときにファティ・リンシャから「お守りだから」って、これ手渡されたんですけど……」

そう言って、彼女が懐から取り出したのは小さな革製の袋だった。

ナルレイシアが『証の硬貨』を入れているものだ。

「あ、そういえばファティ・リンシャに預けてたんだわ」

ナルレイシアが目を瞠りながらつぶやいた——ファティ・リンシャって、もしかして千里眼でらっしゃるのかしらん、と。

がくりと肩を落とし——これはナルレイシアの言葉にではなく、麗しき老婦人の気遣いに対してだ——スカルトードは答えた。

「どちらかといえば、先読みの才でしょう……おさすがと言おうか……」

さすが最年長柱神——とは、誰が聞いているか知れない街中で洩らすことはなかったが。

袋を受け取ったナルレイシアが、中から件の神宝を取り出すのを見て、スカルトードはとりあえず当初の問題が解決したことに安堵の息をついた。

翠唱子の半身候補の青年の出自を考えると、この先波乱含みな展開が待ちかまえているだろうことは目に見えていたが、最早足抜けできる段階でないのは明らかだ。

下手に流されまいと足掻くより、流れに身を任せたほうが、まだしも傷は浅くすむかもしれない——さりげなくひどいことを考えながら、さてと意識を切り替えて、スカルトードはナルレイシアに問いかけた。

「……翠唱子は力を貸してくれそうですか？」

明るい緑の石がはめ込まれた銀の腕輪がしゃらん、と音をたてる。

「んー、んんん？　と……はい、力貸してもらえそうです！　うわぁ、光復活……というか、眩しいくらい！　これなら見逃すことはありませんっっ！」

返ってくるのは、元気いっぱいな少女の声——。

こくりとひとつうなずくと、スカルトードはふたりの少女を促した。

「では、追跡再開といきましょうか。そしてさっさと……いえいえ、一刻も早く新たな柱神候補の身柄を保護しましょう」

内心では、彼も「捕獲」と思っていたのだが、これは彼だけの秘密である。

翠唱子を身につけた途端、それまでのことが嘘のように、視界がすっきりした。
現実におけるそれではない。通常視えないものがはっきりと、ナルレイシアの第三の目とでも呼ぶべきものの前に姿を現したのだ。
夜空に浮かぶ天河さながらに、金の光の粒の流れが視える。
そのそばに、ときおり過ぎるのは、不思議な色彩の男女——宙を舞っていることから、精霊たちと思われる。
「スカーさん、ここは真っ直ぐで……少し行ったところで右に！　わあ、ウォルセンさんって、本当に地理に通じてるんだわ、こんな入り組んだ道、わたしだったら間違いなく迷ってるもの！」
無事にふたりでダカール商会事務所にたどり着けたのは、決して運だけではなかったのだと痛感させられる。
（だけど、視える……視えるわ！　これならすぐにでもウォルセンさんに追いつける！　ああ、翠唱子の力が流れ込んでくる……やっぱりウォルセンさんが本命間違いなしだわ！）
半身に関わることだからこそ、神宝はこれほどまでに力を貸してくれているのだ——他には考えられない。

だったら、自分は無事にウォルセンと翠唱子を引き合わせなければならない。
そして可及的速やかに、彼を説得するのだ。
神宝翠唱子の半身たることを――否、その先に広がる未来を受け入れることを。
（でないと……）
暗い思いが、じわりと胸にわき上がるのを、ナルレイシアはかぶりをふって振り落とそうとした。
（不吉な予感なんかに振り回されてる場合じゃないのよ！　しっかりしなさい、ナルレイシア・フォイリリル・ダカール！　いまはとにかく、ウォルセンさんの確保が最優先事項！）
やっぱりひどいことを考えながら、彼女は声を張り上げた。
「そこの角を左です、スカーさん！　それであとはしばらく真っ直ぐに……って、スカーさん、どうしたんですか？」
ナルレイシアを抱き上げたまま、彼女の指示通り走っていたスカルトードの足がぴたりと止まったのだ。
なにか不都合なことでも生じたのかと青年を見下ろせば、困惑したような灰緑の瞳とぶつかった。
「スカーさん？」

「真っ直ぐと言われましても……ヴィル・ダカール」

行き止まりなんですが――。

告げられて、前方に目を向けたナルレイシアは、「え!?」と目を瞠った。

光の粒は、確かに先に流れている――それに間違いはない。

けれど、現実的な問題として、目の前には頑丈そうな石壁が立ちふさがっているのだ！

（どういうこと？　ウォルセンさんは実は超人的に身軽で、この石壁を越えて先に進んだ……とか？　ううん、もしそうなら光の軌跡はこんな風に真っ直ぐ突き抜けたようになっているはずがない……まさか、壁抜け、とか……？　それこそまさかでしょう！　そんな奇天烈な特技があったら今朝からの追いかけっこだって、もっと楽に……って、だからそういうことじゃなくってぇっっ！）

混乱して考えがうまくまとまらない。

挙げ句の果ては、思わず現実逃避に走りかけたナルレイシアである。

「あー、こういうとき、お師匠ならいったいなんて言うんだろ？　あのひとわたしが不思議系のことに関わるのなぜか嫌がってたから、ろくなこと言ってくれなさそうだけど……」

全然関係ないことを口走り始めた彼女に、スカルトードが呼びかけてくるが――聞いてはいなかった。

「どうせ、見た目に惑わされるな、心の目で視よ――とか、いいかげんなこと言ってはぐらかしてくれるんだろうなぁ。心の目ってなによーって、嘘！　いま、わたし持ってるじゃない！」

つらつらと過去、さんざんはぐらかされ誤魔化されからかわれた楽しくない記憶を浚っていた彼女は唐突にそのことに気がついた。

恐らく今だけの、それもウォルセンに限定されたものだろうが、翠唱子に力を貸して貰っている現在、心眼と呼んで差し支えないものを、自分は持っているではないか――スカルトードあたりに言わせれば、異能者を見分ける視覚は充分心眼なのだが――と！

（お師匠はなんて言ってたっけ？　見た目に惑わされるな、人間は視覚に頼りすぎると頭が勝手に感覚を作り上げて、幻を現実だと思いこむことがあるとかなんとか……確かあれは、暗示の話で、火箸を押しつけられたと思いこんだら、ただの棒に触れただけでも火傷の火ぶくれができたってひとの話だったはず……）

それでは、この目の前に広がる壁についてはどうだろう？

頑丈そうな石壁は、明らかに現実のものに見える。ここを通り抜けることなど不可能に思われる。

だが、それが『嘘』だったなら？

本物そっくりに見えるために、頭がこれまでの記憶から「こうなるに違いない」と一方的に決めつけているのだとしたら？

ぶつかったら痛いに決まっている。はじき飛ばされて転んでしまうに違いない。

頭が『決めつけた』ことに、体は従うに違いない。

けれど、ナルレイシアのもうひとつの目は、ウォルセンの残した光の軌跡を認めている。

真っ直ぐに、壁の奥に繋がる――道。

ウォルセンにたどり着くための、唯一の――。

ふたつの視覚――この場合、どちらを信じるべきかは――考えるまでもない。

「スカーさん、結界術師って、確か目くらましも使えるんですよね」

「ええ、まあ……結界の壁を他者に知覚させないために……まさか、この壁が!?」

さすがと言おうか、すぐにこちらの言いたいことをくみ取ってくれた青年に、ナルレイシアは「十中八九間違いないと思います」とうなずいた。

そうして彼女は、本の虫同盟のかけがえのない同志たる青年に、かなり無茶なお願いをしたのである。

「だからですね、あれって石壁なんかじゃないんです。でも結界壁である以上、素通りとかはできないと思うんですよね。そこで、スカーさん、ものは相談なんですけど、あれ、石壁模様

の仕切り布だと信じて、お腰の剣ですぱっと斬ってくださいませんか!?」

無茶を言っている自覚はあった。

しかし、他に方法がないのも確かな事実なのだ。

さすがに即答できなかったらしいスカルトードが、数瞬の沈黙の後に返した台詞は――。

「……心頭滅却すれば火もまた涼し、ですか……？」

というもので、さらにそれに返したナルレイシアのそれは。

「えー、と……どちらかというと、虚仮の一念岩をも通す、じゃないかと……」

で。

黙って聞いていたアゼルフィアが、ぽつりと「なんだかどっちも違うような……」という感想を零したのだが、これはふたりの耳には届かなかった。

結局のところ、諦めたようにため息をついたのはスカルトードだった。

「あー……すみません、ヴィル・ダカール。あなたを抱き上げたまま刀を振り回すことになると、非常に居心地が悪いと思うのですが、言い出した者の責任として受け入れていただけますか？」

彼の左の肘から手首の間に座るような形で乗っていたナルレイシアは、その台詞に慌てて身を捩った。

「あ、すみません！　邪魔ですよね、降りますから！」

いかに腕が立とうと――人外魔境の美貌を誇りながら、スカルトードは治安の悪い場所を歩いても大丈夫なほどには剣技にも体術にも長けているのだ！――大荷物を抱えていては、実力を発揮することはできないだろうと思って、ナルレイシアは降りようとしたのだが、意外にもこれにスカルトード本人が否やを唱えた。

「いえ、申し訳ありませんが、できればヴィル・ダカール……このままで。あなたと離れてしまっては、わたしはどうにもアレを布きれだとは思えそうにないものですから」

「え、そうですか？　じゃあ、このままでいますけど、バランス崩して落ちるのもイヤなんで、わたしスカーさんに抱きついちゃっていいですか？」

すでにこの体勢だけで、周囲に人目があれば黄色い悲鳴の嵐状態であるというのに、そのことにかけらの自覚もないナルレイシアはごくあっさりと悲鳴増幅間違いなしな言葉を返し、さらには返事を待たずに実践した。

正確なところを言うならば、その結果彼女の両腕はしっかりとスカルトードの首にまわされ、その胸部は彼の左の腕の付け根から肩にかけて押しつけられた格好になったわけだが……人外魔境の美貌の青年は、なんら感慨を覚えた様子もなかった。

「ああ、これなら大丈夫かな？」

などと、色気のかけらも感じさせない声音で答えると同時に、右手で腰の剣を引き抜いた。
「ヴィル・ダカール」
確認を取るように、スカルトードが囁きかけてくる。
「はい」
傍目には大層色っぽい場面となっているというのに、いっさいその自覚のないナルレイシアは淡々と答えた。
「これ、は本当に石壁に見える模様の布なのですよね？」
確認を取るように尋ねられ、ナルレイシアは大きくうなずいた。
「間違いありません」
本当は、先ほども言ったとおり、完全にそうとは言い切れない。
だが、スカルトードが求めているのは、石壁にしか見えないそれを、己が剣で切り裂くことができるという確信だ。石壁なら切れるはずがない。だが、そう見えるだけの布なら切ることは可能である。
だから、未だ疑いを捨てきれない彼に信じさせるには、ナルレイシアは曖昧な答えを返すわけにはいかないのだ。
「あれは、石壁を描いた画布です。剣であっさり斬れるものです。そして、その向こうに……

ウォルセンさんがいるんです！」

「……わかりました。あれは布ですね。ですが、紗には思えませんが……」

スカルトードは必死に、視界にある石壁のありようと、ナルレイシアが告げる『石壁模様の布』とのイメージを近づけようとしているのだろう。

それがわかるから、ナルレイシアは話を合わせる——斬れるのだ、とスカルトードが確信できる具体的な像を、彼が結べるように、と。

「そうですね、分厚い感じがします。敷物にしてもおかしくないぐらい、頑丈な布かもしれません。でも、スカーさん！　あくまでこれは仕切り布です！　斬りつけても、奥に壁なんかありません！　斬れば、奥は絶対に見えるんです！」

「そうですか」

ナルレイシアの言葉に、スカルトードはくすりと笑いを零した。

「じゃあ、斬らなくてはなりませんね」

告げると同時に一閃——！

そうして、視界は劇的に変化した。



まさにそれは、空間が切り裂かれたとしか言いようのない光景――。
それまで、ナルレイシアたちの前に立ちはだかっていた石壁が、スカルトードの一撃によって、崩れ落ちるのではなく消え失せたのだ。
そこには瓦礫のかけらすら残されてはいなかった。
「……なるほど、確かに仕切り布だ」
剣を鞘に戻しながらつぶやくスカルトードの声は、どこか自嘲を孕んでいた。
しかし、そんなことはナルレイシアにはわからない。
光の軌跡を追うにあたっての、現実的な障害が取り払われた――それが、この時点の彼女における現実だった。
「やっぱりだ……！　真っ直ぐです、このままスカーさん、進んでください！　距離はそう遠くありません、ウォルセンさんはそこにいます！」
ナルレイシアが叫んだ瞬間、ほんの少しだけ、スカルトードの腕が強ばった。
しかし、そのことに彼女が違和感を覚えるより早く、彼の足は地を蹴った。
そうして――。
ようやくたどりついた場所で、ナルレイシアが目にしたのは――。
ふたりの、男がもめている場面だった。

先ほどの目くらましによるものとは違う、本当の壁に追い詰められている栗色の髪の青年は、必死に何かに抗うかのようにかぶりをふっていた。
そして、そんな彼を追い詰めるのは黒髪の男――。
「イヤだって！」
叫んだ青年の顔が見えた瞬間、ナルレイシアは叫んでいた。
見間違えるはずがない――その緑味の強い、独特な輝きを放つ榛の双眸の主を！
「ウォルセンさん！」
思わず呼びかけた瞬間、ウォルセンを追い詰めていた男が振り返った。
それは、黒髪の男。
それは、黒瞳の男。
それは……その顔立ちは……それは。
脳裏に記憶が逆流する。
一年以上昔の……過去だとわかっているはずのそれが。
『……困るんだよねえ、そういう妙な真似されるとさあ』
囚われた屋敷で、せめて自分の所在を外部に知らせようと、『証の硬貨』を屋敷の外に投げだそうとしたナルレイシアを、強固な結界でもって阻んだ術師。

『まあ、あんたにとっては、おれは悪い魔法使いだろうがね』

そう告げられた後のことは思い出せない。

けれど、そのあと自分が麻薬を混ぜた香で眠らされたのは紛れもない事実で。どうやらそのせいでえんえん眠らされていたというのも事実で。中毒にならずにすんだのは、まさに幸運だったと聞かされた身としては、凶悪至極な結界術師としか認識できなかった。

だから。

なにか策を講じるよりも先に、体が動いてしまったのだ。

「ウォルセンさん！」

叫んで——けれど、スカルトードに抱き上げられたままの体では、彼に向かって走り寄ることもできなくて。

「スカーさん！　お願いします！」

叫ぶより先に、スカルトードの足は動いていたのだけれど——それでも。

それでも、だ。

間に合わなかった——。

ナルレイシアたち三人が追いすがるように駆け寄る中、ウォルセンと黒髪の結界術師の青年は、忽然とその姿を消したのだ。

# 3

懐かしい夢を見た――無邪気に笑っていられた頃の。

ディエーン南部のほとんどを占めるマルシアス侯爵領――。

その片隅の田舎――オラントの地にウォルセン・ディーシア・オルス・マルシアスは生まれた。

マルシアスの姓を名乗ることは許されていたものの、他の一族に比べれば猫の額ほどの領地しか持たず、さりとて他方面で働きを見せているわけでもない彼の家は、単に『マルシアス』であるだけの、少しばかり裕福なそれにすぎなかったのだ。

体裁を整えるために整えられたという屋敷では、空き部屋の方が多いくらいだったし、使用

人も数人いるだけだった。

マルシアスという名が、この地方を統治する侯爵家と同じだとはわかっていたが、あまりにも遠すぎる存在だと感じるがゆえに、別の世界の存在だと認識していた。

事実、四代も前の、貴族にはありがちな政略結婚を厭うあまり家を飛び出し、その先で本家の得にもならぬ娘を妻に迎えた三男坊――どうやら後に和解したらしく、おかげでマルシアスの姓を許されたのだが――の子孫のことなど、本家はほとんど忘れ去っていたのだから、ウォルセンの認識は正しかったと言えるだろう。

彼にとっての世界は、大好きな両親と家族同様な三人の使用人と、気さくにつきあえる領内の住人たちと……そうして、精霊との交流が全てだったのだ。

狭い世界だと言われるかもしれないが、彼にとっては充分で、何ら不足を感じるものではなかったし、不安を覚えるものでもなかった。

そう、五歳になるまでは。

物心つく前から、精霊と親しみながら、しかし理解力が追いつかずに、彼らから投げかけられる言葉を一方的に受け入れるしかなかったウォルセンが、母親に無邪気に問いかけたのは、偏にわからないことをわからないままにしておくのが落ち着かない――そんな理由に過ぎなかった。

本当は、それまでも、何度か尋ねようと試みたことはあったのだが、うまく言葉を選べなくて、結局途中で挫折を繰り返していたのだが。

だって、それを確かめるのは、ウォルセンにとっては非常に大きな抵抗のある、尋ねることさえ、渾身の勇気を振り絞る必要のある重大事象だったのだ。

けれど、だからこそ、ウォルセンは真実を求め、そうして幼い心に大きな覚悟を背負った上で、勇気をもって真実に立ち向かうべく心を決めたのだ。

そうして――ある日、ウォルセンは意を決して母親に問いかけた。

「お母さん。ぼくはお母さんとお父さんの子供だよね？」

縋り付くような目をして問いかけたウォルセンを、母がどんな思いで見ていたのかはわからない。

あるいは、現状に不満を覚える子供にありがちな『実はぼく（わたし）には、事情があって手放さざるを得なかった、お金持ちの両親がいるのかも』という夢想に駆られただけに思われたのか――。

けれど、その時、ウォルセンの母であるひとは、笑って流すでもなく、言葉で誤魔化すでもなく、真面目な顔で逆に問い返してきたのだ。

「どうして、そんな風に思ったの？」

と。

誘導尋問にかかったことを、五歳のウォルセンは気づけなかった。

だって——と言いかけて、口ごもったところを、さらに「どうしたの」と問いかけられては答えずにはいられなかった。

「……お母さんは、ミリュエルでしょう?」

母親——ミリュエルは「そうね」とやさしい笑顔でうなずいた。

「……お父さんは、ワディアール……」

そうよ、とうなずかれた瞬間、問いかけずにはいられなくなった。

「じゃあ、『ランティ』は!?」

母がなにかを口にする前に、一気にウォルセンはため込んだものを吐き出した。

「ぼくのこと、『ランティの子供』だって! 精霊たちが言った! ねえ、ランティって誰のこと!? ぼくはお父さんとお母さんの子供じゃないの!?」

悲鳴にも似た問いかけに、母親であるひとは力一杯抱きしめることで答えた。

「ごめんなさい、ウォルセン……セーン。あなたがそのことで悩んでいることに気づけなくて……本当にごめんなさい。あなたは、間違いなくわたしと旦那(だんな)さまとの間に生まれた子よ。精霊たちが『ランティの子供』とあなたのことを呼ぶのは、あなたの左の二の腕にある痣(あざ)のせい

なの」

余所の子ではないと、母に保証してもらったことで心底安堵したウォルセンは、けれど他の同年代の子供より回転の速い頭ゆえに、新たな疑問をはじき出した。

「痣って……この、蛇みたいな？」

それは、彼が生まれながらに持っていた、不可思議な形状の痣。

翼ある蛇が卵とも玉ともつかぬものを抱きかかえているようにしか見えない——緋色の。

「そう。お父様の……マルシアス家のご先祖に、ファタランテさまという一族を滅亡から救われたお方がいて、その方の額にセーンと同じ痣があったのですって。ファタランテさまは、セーンと同じように精霊と親しく触れあえる能力をお持ちだったらしくて、古くからいる精霊たちには『ランティ』と呼ばれていたそうよ。そして、その方が亡くなった後、何人かファタランテさまと同じ痣を体に持って生まれてきた子供たちがいたらしくて、それを一族では『ファタランテ様の愛し子』とか、『聖印の子供』とか呼んでいるらしいの。精霊たちが『ランティの子供』と呼ぶのは、ファタランテさまと同じ痣を持つ子供……というぐらいの意味だと思うわ。だから、セーンがそんなに悩むことはないのよ」

ぎゅう、と抱きしめられて、切々とそう語られて、ウォルセンは心底ほっとした。

自分は真実父と母の間に生まれた子供なのだ——五歳の子供にとって、それはなにより安心

できる言葉だった。

けれど――。

その後につづけられた母からの言いつけには、首を傾げずにはいられなかった。

「セーン、ひとつだけお母さんと約束してほしいの」

固く抱きしめられたまま告げられた言葉は、いかに聡明とはいえ、いまだ五歳に過ぎないウォルセンには理解不能なことだった。

「セーン……精霊たちに、あなたが『ランティの子供』だということを、言いふらさないようにお願いして欲しいの。そうして……その痣のことを、あなたも誰にも言わないでちょうだい」

お願い――耳元で囁く母の声はなぜか必死で、理由があるならきちんと説明してほしい……とは、到底口にできなかった。

それでも、納得できないことにはうなずけなくて――でも、母の必死の訴えは絶対にかなえたくて。

「……どうして……どうしても……？」

震える声で、そう紡ぐのがやっとだった。

「どうしても」

幼いウォルセンの体を抱きしめながら、母はそう答え、少ししてから「……離されたく……ないの」とくぐもった声で洩らした。

くどいようだが、ウォルセンは年齢からかけ離れた聡明さを誇る子供だった。

母のこの言葉から、自分が精霊たちの言うところの『ランティの子供』であることが知れたら、家族から引き離されるらしいことを認識した。

大好きな家族、大好きな皆、大好きなこの場所――。

離れたくなどはない。

だから、「うん」とうなずいた。

「絶対に、言わないし……精霊たちにもお願いするよ」

固い、固い決意でもって、ウォルセンは母に誓った。

そうして、その誓いは決して破られることはなかった。

そう――二年後、彼らの平穏な世界が破壊された瞬間ですら、彼と彼が親しむ精霊たちの沈黙の誓いは破られてはいなかったのだ。

誓いは守られた。
沈黙は守られた。
それでもなお、秘密は――。
運命の悪戯ゆえに、暴かれたのである――。

七歳になって間もなくのころだった。
遠い縁戚で、マルシアス一族中では彼の家より格が高いある一家が、避暑地の別荘に向かう途中で一夜の宿をウォルセンの一家に求めたのがきっかけとなった。
マルシアス家とは名ばかりの傍流も傍流である家であるウォルセンの実家は、マルシアス中枢に近い分家の頼みを断り切れなかった。あまりに頑なに拒んだ場合、なにかまずい事情があるのではないかと不審を買うことを恐れてのことでもあった
そうして訪れた一家は、一晩の歓待を受けた後、速やかに目的地に向かって移動するはずだった。
しかし、その夜半からの激しい雨が、その予定を狂わせた。

異常な増水に、近くの橋が通行止めとなり、一家は足止めを食らったのである。

橋が流されたのであれば実家に引き返す選択も生まれたのだろうが、どうやら数日待てば橋は通行可能になるということが判明し、一家はウォルセンの住む家に滞在しつづけることになった。

このことに、ウォルセンの両親は一気に心的負担を覚えたのだが、事情を知らないウォルセンは特になにも感じなかった。一人っ子である彼にとっては、その一家の息子との触れあいは楽しいものでもあったのだから。

ただし、両親からきつく言いつけられていた左の二の腕の痣については、彼はあくまでも隠し通すつもりだった。絶対誰にも見せてはいけない、知られたらもう家族と一緒に過ごせなくなるのだと、小さなころから耳にたこができるほどに言い聞かせられてきたことだったからだ。

しかし、同時に相手に対して立場が弱い現実の前で、秘密を守りきることはできない。

悪戯を思いついた悪戯っ子の少年が水たまりで転んだのを見て、思わず笑ってしまった結果、腕を引っ張られ、同じ目にあってしまったのだ。

すぐさま風呂直行――このとき、ウォルセンにとって不幸だったのは、その用意をしたのが臨時雇いの人間であったことだ。

ウォルセンの事情を知らない相手は、子供相手だと思ったのか、「ふたりとも一緒に入ってください」と、二人一緒に浴室に放り込んだのだ。

「なんだよ、その包帯。怪我でもしてるのか？」

労りの言葉に聞こえないでもない台詞を口にし、しかし年長の少年――本家に近しい分家の跡継ぎと決まっている彼は、自らの優位を疑わぬ態度でウォルセンの包帯に包まれた左腕に手を伸ばしてきた。

ここがウォルセンの自宅であり、少年とその一家がここ数日降り続いた雨のせいで足止めされ、屋敷に滞在している客人である以上、傍若無人に振る舞われる筋合いはないのだが、いかんせん両者の間には家格の違いという壁が存在していた。

ウォルセンの家がディエーン南部の大領主――マルシアス家にあって傍流も傍流の出であるのに比べ、少年の両親は本家にほど近い有力な分家の当主夫妻だったのだ。

普段であれば、口をきくことはおろか、近づくことさえ許されないほどに、その立場は隔てられている。

それがわかっているものだから、少年はどこまでも優位者として振る舞うのだ。
場所が、浴室であったのも――ふたりがそこに送り込まれた状況もまずかった。
雨上がりの庭で遊んでいた少年が、過って水たまりで転んだのを、よりにもよってウォルセンが目にしてしまったのも運が悪かった。
七歳の子供らしい無邪気さで、つい笑いを洩らしてしまったのも――その態度に少年がむっとし、一回りは小さなウォルセンの腕を引っ張り、同じ泥水まみれな状況に引き込んだことも……きっかけは、巡り合わせと子供の悪戯心でしかなかったのだ。
そうして、泥水まみれになったふたりの子供が向かった先にいたのが、先日屋敷に雇われたばかりの人間だったことも――いや、ここまでくれば、運命の悪戯、もしくは気まぐれと呼んでもいいだろうか。
悪戯っ子ふたりと見なした新しい家人は、有無を言わせぬ迫力で「ふたりとも一緒に浴室へ行ってください」と宣言した。
予定になかった客人の逗留に、屋敷全体がぴりぴりしていたのも……それまでの生活の破綻の一因だったのかもしれない。
本当に、誰が悪かったというわけではないのだ。
だが、追い立てられるように向かった浴室で、少年は当然のことながら、ウォルセンの左の

二の腕に巻かれた包帯の存在に気づいた。

気づいて、そうして単純な好奇心のままに手を伸ばしてきた。

「あ」

咄嗟に身をひねり、その手を避けたのが……どうやらまずかったらしい。

むっとしたように眉をひそめて、遠縁の——自分よりずっと本家に近い場所に生まれた少年は、大柄な体格にものを言わせ、強引にウォルセンの腕の秘密を暴き立てた。

無理矢理、ウォルセンの包帯をむしり取ったのだ。

包帯の下から現れたのは、一目でも見たが最後、決して忘れることなどかなわないほどに印象的で特徴的な緋色の痣——。

翼ある蛇。

「なんだ、これ？」

事情はわからずとも、なにか感じるところがあったのか——呆然とつぶやく少年の声に、ウォルセンははっとした。

これは見られてはならないものだ。

決して人に見せてはならないと、物心ついて以来、両親から繰り返し言い聞かされてきたことだった。

だから、必死に頼み込んだ――このことは、絶対に誰にも言わないで欲しい、と。

この場に、もしもウォルセンの両親のどちらかでもいたならば、もっと効果的な口止めができていたかもしれない。

ただ口止めするのではなく、「言わない方が得」だと少年に思いこませるように話を運ぶことができたかもしれない。

だが、その時、そこにいたのはウォルセンであり、自らの痣の意味を知らない彼は、少年にただ頼みこむことしかできなかったのだ。

そうして――。

気まぐれで好奇心旺盛な少年は、そのウォルセンの必死な様子を目にしたとき、当然と言えば言える「この秘密をばらしたらどうなるんだろう?」という興味を覚えてしまったのだ。

彼は、自分の見た秘密を、楽しそうに父に打ち明けた。

その瞬間、ウォルセン・ディーシア・オルス・マルシアスの、裕福とは言えないが、穏やかで幸福だった日々は打ち砕かれたのだ――。

件の一家が無事に別荘へと旅立ってから約一ヶ月後のこと。

突然訪れた『本家』の使いを名乗る男たちに、ウォルセンはほとんど身ひとつで連れ去られることとなったのだから。

その理由はただひとつ。

彼の左の二の腕にある緋色の痣が、本家――マルシアス家に代々語り継がれる伝説に繋がるものだから、だった……。

# 4

……マーシャスの女神と呼ばれる女性ファタランテは、確かに尋常ならざる異能の持ち主であったのであろう。

マンディアルの民が長らくエルアク大山脈から降りることなく暮らしてこれたのは、かの女性の一族が巫女のような役割を果たしていたからに違いない。

当時のマーシャスの長が、いかなる思いでファタランテを娶ったのかは明らかではないが、恐らくその後、思いもかけないことが起こったものと思われる。

なにが起こったかは想像するしかないが、マーシャスの一族がエルアクを離れたのは、彼女の身柄に拘わる問題が生じたからであろう。それに追っ手がかかったことを思えば、彼女の存在はマンディアル族全体にとって重大な意味を持つものとなっていたに違いない。

かつての同胞に追い詰められ、長が倒れた時、彼女はその力の一端を示した。

歌声によって、嵐を呼び寄せたのだというが、それが完全に彼女の力であったとは思いがた

い――それはさすがに『人間の子』には過ぎた力である。

だが、彼女の歌声が、精霊たちを動かしたのは確かであろう。風を起こし、雨雲を引き寄せたというのであれば得心がいく。

しかし、それから間もなく彼女もまた倒れる。

強大すぎる力に肉体が耐えられなかったのか、あるいは元々病を得ていたのかはわからぬが、これもまた彼女が『人間の子』に過ぎぬ証左となろう。

彼女に子供があったかどうかはわからぬが、恐らくはいたのであろうとわたしは推察する。

そうでなければ、後に出現する『聖印の子供』の存在が説明できないからである。

ファタランテの額にあったといわれる、独特な形の痣は、あるいは異能を持つ子供にのみ顕れる目印のようなものではなかっただろうか――そう考える方が、彼女がいまわの際に言い残したという『甦り』よりはよほどに説得力がある。

恐らく彼女は、いまだ安住の地を見いだせぬままに長夫婦を失ってしまう一族に希望を持たせるために『甦る約束』を与えたのだろう。

その時点における判断は間違ってはいない。

希望がなければ故郷を遠く離れたマーシャス一族が生き延びることは難しかったであろうから――だが、彼女の言葉は一族にとって大きすぎた。それが後に一族を縛ることとなると、彼

女が想像できたとは思いがたい。
しかし、人間の思いと言葉は、時に思いがけない力を揮う。
ふたりの『聖印の子供』は、紛れもなく一族の願いが生み出したのに違いない。
一族の命運を背負うべき絶対的長を求める思いゆえに――。

マギル・レヴィン　未発表原稿より一部抜粋

家族から無理矢理引き離され、連れて行かれた先は、両親が遠い世界のことのように話していた本家の屋敷だった。
ディエーン南部を治める大貴族マルシアス侯爵家の本宅にして居城である黒鷲城の、広大にして威容な外観を目にした瞬間、ウォルセンの心は怯え、縮こまった。
そこは、幼い彼にとってはあまりにも異質で恐ろしい場所に思えたのだ。
両親がそばにいてくれたなら、少しは違ったかもしれない。
大丈夫だと、父が、あるいは母が身を竦ませる彼の肩にそっと手を置いてくれたなら……そ

れだけで、なにかが違っていたのかもしれない。

しかし、それはかなわなかった。

ウォルセンはただひとり、黒鷲城に連れて来られ、そうしてたったひとりで、一族の頂点に立つ頭領――マルシアス侯爵の前に立たされたのだ。

当代侯爵エルセイド・アリアナ・オルス・マルシアスという男性は、子供の目から見て、到底親しみやすい空気を纏うひとではなかった。

その正面に立っているだけで押しつぶされそうな圧迫感を放つ、自らの父親より年上の男性を前に、ウォルセンの心は萎縮した。

……ただ、恐ろしかったのだ。

そんなウォルセンの心境を知ってか知らずか――あるいははなから気にも止めていないのか、エルセイドはひどく面倒臭そうな視線を彼に向けてきた。

「ああ、君が」

『聖印』の子だね。

ぴくり、と肩が強ばった。

痣のことを知られて以来、事あるごとに繰り返し聞かされた言葉に、しかしウォルセンはまだ慣れることができずにいたのだ。

女神の愛し児、聖印の子供――それらは家族の元にいる頃には、一度として聞いたことのない言葉だった。

両親は敢えてそれらの言葉を封印していたのだと、今ならわかる。

なぜなら、ウォルセンは精霊たちと交わる異能を持つ子供なのだから。

この屋敷に連れて来られて以来、何度も繰り返された言葉の意味を、ウォルセンはごくごく自然に精霊たちに問いかけた。

そうして、いともたやすくその答えを得ることができたのだ。

――女神の愛し児、聖印の子供……どちらも同じ意味よ？

――そう、かつて故郷を追われたマーシャスの一族を守り抜いた緑のお方さま

――あの歌声は忘れられない

――あの麗しいお方の額にあった緋色の美しい痣も！

――けれど、おいたわしい……緑のお方さま！

――望み半ばで息を引き取られるだなんて……

――マーシャスの民に安住の地を与える前に命が尽きるだなんて

――願いを、言葉に残されたのも無理はないわ

精霊たちの言葉は曖昧すぎて、具体的なことは当時のウォルセンには読み取れなかった。

けれど、物心ついて以来、精霊たちと交流してきた彼は、彼らの話の流れのどこで問いを放てば的確……とは言い切れないかも知れないが、それに近い答えが返ってくるか、それなりに学習していた。

だから、精霊たちの会話に割ってはいる形で問いを放った。

「それって、言霊に託したということ？」

言葉には力が宿る――悪しき言葉には負の力が、善き言葉には正の力が。

――いいえ、違うわ

――いえ、確かに言霊の力はあった……けれどあれはお方さまの純粋なる願いだった

――そう、彷徨えるマーシャスが、安住の地を得られるようにと……あれは限りなく祈りに近い言葉だった……。

――けれど、それが指標になってしまった……。

結果として、『緑のお方さま』と精霊に呼ばれるひとの遺言が、いまでも一族を縛っているのだ。

安住の地を約束できぬままに世を去った女性の額にあったという、『玉を抱える翼ある蛇』の形をした痣を、受け継ぐ子供が生まれたと言うことで。

ひとり目は五百年前、ふたり目は四百二十年前に生まれたのだという。

そして、ふたりはそれぞれ、一族を繁栄に導いたのだという。
その三人目が、自分なのだと言うのだ。
だから、一族宗家であるマルシアス家に引き取られることになったのだと。
自分の左の二の腕にある緋色の痣がその証なのだと！
ふざけるなと言いたかった。
そんなもののために、自分は家族から引き離されたのか。
そんな世迷い言を信じる誰かに答えることを望まれているのか――まったく冗談ではない！
だから、エルセイドに対して、ウォルセンは不敬と知りつつも、吐き捨てるような口調で答えたのだ。
「やめてください」
七歳の子供の、反抗的と評するにはいささか過ぎる態度に、一瞬マルシアス家の当主は目を瞠ったが、すぐに愉快そうに肩を揺らした。
「なるほど。確かに君は聖印を持って生まれただけのことはあると見える」
余裕に満ちた相手の言葉に、どう返していいのかわからず、ウォルセンは歯を食いしばった。
言葉だけなら、なんとでも返せる自信はあった。

けれど、それだけではかなわないと感じるなにかが、目の前のエルセイドにはあった。いいように扱われたくはない。

だが、どう考えても、この相手と対等にやりあえるとは思えないのだ。

それが、とても悔しい。

ぎり、と唇を噛みしめると、エルセイドが実に愉快そうに声を上げた。

「聡い子だ。聖印の子供に関する伝承は、あながち間違いではないらしい」

くすくすと笑いながら、エルセイドは膝をつくと、ウォルセンより少し高い位置から、真っ直ぐに彼の目を見下ろした。

「お前の聡さに免じて、正直なところを打ち明けよう。お前がこれまで、あるいはこの先、どんな甘言を耳に囁かれようとも、この事実だけは胸に刻んでおくといい。わたしは、わたしの後を継ぐ者として、わたしの息子以外を選ぶつもりはないのだよ。だが、聖印の子供であるお前を野放しにするつもりもない……お前は、生き延びるために、賢い選択をなさなければならない」

それは、ただひとつの道しか示さない、傲慢な宣告だった。

その意味をウォルセンが違わず理解したことを見越した上で、エルセイドは戯れに問いかけたのだ。

「ところで、約束の地とはどこにあるんだい？」
と――。
答えなどウォルセンが持たぬことを知った上で――。

表面的なことだけを見れば、ウォルセンの日々は以前に比べて素晴らしいものと言えたかも知れない。
マルシアス一族のなかにあって、傍流も傍流でしかないウォルセンの生家は、准爵位の面目を保つために汲々たる暮らしぶりを強いられており、お世辞にも豊かとは言い難い状況にあったのだから。
織りも仕立ても極上な肌着に衣服、毎日丁寧に火熨斗をあてられたシーツが敷かれた寝台、以前なら年に一度食べられたかどうかという贅沢な食事が毎日用意される。
だが、どちらの日々を選ぶかと問われれば、ウォルセンは迷わず生家でのそれと答えたことだろう。
生きる上での豊かさは、物質的なものばかりではないのだ。

どんな上質な服を着ようと、どんな贅沢な食事が用意されようと、楽しい、心地よいと感じなければ、そんなものに意味はないのだ。

なにより、ウォルセンの心はその贅沢な日々の中、絶えず傷つけられつづけていたのだから——幸福など覚えられるはずがなかったのだ。

本家に引き取られて半月ほど経った頃だろうか——本家の養子となった彼には、数え切れないほどの面会が申し込まれるようになった。

七つに過ぎないウォルセンに、断る権限など与えられるはずもなく、エルセイドの許可した客たちに、見世物よろしく披露される日々……繰り返し尋ねられる問いに、彼の心は疲弊の一途を辿った。

なぜなら、彼らは一様に『約束の地』について尋ねてきたからだ。

いや、正確に言うなら、それしか口にしなかったのだ。

『約束の地とはここではないのですか？』

『約束の地はどこにあるのですか？』

『そもそも約束の地などあるのですか？』

知らないと、いくらかぶりをふっても彼らは納得することはなく、エルセイドの許しを得る度にウォルセンを訪ね、同じことを繰り返し問うのだ。

彼らに悪意はなかったのかもしれない。

だが、あまりにも繰り返される問いかけに、ウォルセンのなかでそれは悪夢に変じてしまった。

眠る度に、恐ろしい声が問いかけてくる――約束の地はどこだ、約束の証を示せ、と。

そんな日々のなか、自然に食欲がなくなった。勝手な本家への怒りから、親しむ努力をしなかったせいもあって、意固地な養子の食が細くなる一方だと言うことに気づく家人もいなかった。

自分でもまずいと気づいた時には、ウォルセンはすでに普通の食事を体が受け付けなくなっていた。

そこで、せめて消化のいいものを頼むなりなんなりすればよかったのだろうが、意地になっていた彼はそれをせず――。

そうして、このままでは衰弱死が待っていることを認識しながら、「それでもいいか」と思うに至った。

こんな悪夢のような日々を繰り返すぐらいなら、死んだ方がまだましかもしれない、と。

そんな風に、意識と体が死に向かって傾きかけていたある日のこと――。

ウォルセンは運命の翡翠と出会ったのだ。

# 5

するりと寝室に入り込んできたのは、信じられないぐらい綺麗な子供だった。
濃褐色の髪はさらさらで、指ですくってもすぐに隙間からこぼれ落ちそうだ。
少し肌色は白すぎるけれど、病的には見えない——雪花石膏、という言葉が脳裏に浮かんだ。
本当に、人間とは思えないぐらいに完璧な美貌……中でも圧倒的なのは、深く澄んだ翡翠の双眸だ。
強い光をたたえて、きらきらと輝くさまに、ウォルセンは誰何も忘れて見とれてしまった。
(誰?)
とも思わなかった——いや、思えなかったというほうが正しい。
ただただ彼は突然現れた子供を見つめることしかできなかったのだ。
相手がウォルセンに向かって問いを放つその瞬間まで。

「君が、僕の弟になる子？」

澄んだ、綺麗な声だった――かなうことなら、ずっと聞いていたいと願うほど。

しかし、その声が紡いだ内容故に、ウォルセンは陶然たる気分から引きはがされた。

（弟になる……？）

疑問が浮かんだ瞬間、エルセイドの言葉が甦った。

『わたしは、わたしの後を継ぐ者として、わたしの息子以外を選ぶつもりはないよ』

無理矢理両親から引き離し、この屋敷に連れて来ながら、そんなことを平然と告げた傲慢な男の顔を思い出す。

ウォルセン自身、エルセイドの言葉は願ってもないことだった――こんな家など継ぎたくもない。望んだのは家族とともに、貧しくとも楽しく暮らす日々だ。

息子に後を継がせたいのなら、自分のことは放っておいてくれればよかったのだ。『聖印の子供』を放置しておけないというだけの理由で、こんな風に飼い殺しにするぐらいなら。

（これが……本家の息子）

エルセイドが「補佐しろ」と言った子供。

そう認めた瞬間、ウォルセンは目の前の少年に強烈な怒りを覚えた。

（こいつのせいで……！）

そう言い切るのは理不尽だと、どこかではわかっていたけれど、このときウォルセンには、怒りをぶつける対象がほかに見つからなかったのだ。

「来るな」

拒絶の言葉は、しかし掠れて声にならなかった。

口のなかは渇ききり、喉はひゅうひゅうと音を奏でるだけ――。

そんなウォルセンの様子に、子供は綺麗な顔を心配そうに翳らせた。

(そんな顔をしたって、誤魔化されないぞ)

ぎりぎりと睨みつけながら、ウォルセンは初めて現状を呪った。

声も出せない。

追い払おうにも腕どころか指一本動かせないほどに衰弱してしまったその体を。

その結果、相手が近づいてくるのを止めることさえできないのだから!

そんなウォルセンの心中を知ってか知らずか、まるで滑るような足取りで近づいてきた褐色の髪と翡翠の双眸を持つ子供は、寝台から起き上がることもできないウォルセンの顔を覗きこむと、「やっぱり、顔色が悪いね」と心配そうにつぶやいた。

「食べていないんだって? 駄目だよ、ちゃんと少しでも食べないと」

(余計なお世話だ)

声もなくつぶやいた言葉は、なぜか相手に伝わったようだ。
「余計じゃないよ。僕は君のお兄さんになるんだから」
翡翠の瞳には、純粋に自分を思いやる光が浮かんでおり、だからこそウォルセンは苛立ちを抑えきれなかった。
「誰が……！」
（お前を兄だなんて認めるか！　お前なんかの弟になったつもりはない！）
敵愾心も露わに睨みつけると、子供はさすがにこちらの怒りを感じ取ったのか、微かに眉をひそめた。
呆れたのかもしれない。だがかまわないと思った。
（いいから、もう行ってしまえ）
満足に声すら出せないこの状況で、これ以上翡翠の目の子供と一緒にいるのは耐えがたかったから、すっと相手が身を引いたことにほっと安堵すら覚えた。
（そうだ……放っておいてくれ）
そのまま、相手が部屋から出て行ってくれるのを期待したウォルセンだったから、ぱたん、と扉の閉まる音を聞いた時には、小さく息をついた。
（もう来るな）

正直、二度と会いたくはなかった。
だから心からそう願ったのだけれど――。
彼の願いが天に聞き届けられることはなかった。
四半時もしたころだろうか……再び寝室の扉が開いたのだ。
(なんだよ、もう……僕は放っておいて欲しいだけなのに……!)
最早、苛立ちさえ持続できず、泣きたい思いで音のした方に目を向けたウォルセンは――次の瞬間、驚きに目を瞠った。
翡翠の瞳の子供は、山盛りの桃の入った籠を両手で抱えていたのだ……。

「果物なら、食べられるんじゃないかと思って」
はにかんだ笑顔でそう告げられても、ウォルセンは感謝する気にはなれなかった。
しかし、彼が反応を返さないことに、翡翠の子供は一向に頓着した様子を見せなかった。
近くにあった椅子を寝台のそばに持ってくると、桃と一緒に持ち込んできたらしい小振りのナイフで桃と格闘し始めた。

どう見ても、手慣れているとは言い難い手つきで、桃の皮を剝こうとしている少年の様子は、はっきり言って心臓に悪い代物だった。

体が動くなら、自分がやるから代わってくれと言いたいぐらいに、その手つきは危なかしい上に……予想に違わず指が赤く染まっていくのだ。

最初こそ、出来もしないことをやろうとして馬鹿な怪我をする少年のことを、いい気味だと思っていたウォルセンだが、いつまでたっても諦めようとしない姿を見ていると、心配……などではないが、はらはらさせられすぎて、終いには泣きたくなった。

（もう、やめろよ……第一、そんな血まみれになった桃なんか、誰が食べたいもんか……）

そう思うのに、言えない——声が、出ないから。

しかも、ようやく皮を剝いた桃を、少年は切り分けるのではなく、両手で包むようにして、ぎゅっと深皿の上で潰したのだ。

自分と同じぐらいの——小さな手を伝って、桃の果汁が深皿にしたたり落ちる。

少年は、それに水差しから水を注いだ。

さらには——行儀の悪いことに——深皿に指を突っ込む始末。

（なにがやりたいんだ……）

あきれ果てて言葉もないウォルセンは、しかし次の瞬間、一見わけのわからない少年の行動

の意味を知った。
水で薄めた桃の果汁をつけた指先で、少年はウォルセンの唇に触れて……濡らしたのだ。
反射的に、舌で唇を舐めた。
口いっぱいに、桃の味が広がった。
（甘い……）
思った時には、舌は再び唇にのびた。
ウォルセンのその様子を、少年が嬉しそうに見つめていた。
「待って……はい」
同じように、果汁で濡れた指で、唇に触れてきた。
何度も何度も、ウォルセンが果汁を舐め取る度に、そうやって彼は唇を濡らしてくれた。
「……もう、いいから……」
ウォルセンが声を出せるようになるまで、ずっと——。

声が出せるようになったウォルセンが少年に告げた言葉は。

「もう、来るな」
嬉しそうに笑う少年の答えは。
「うん、今日はもう帰る」
そうして、「ここに来たのは内緒だから」と言いながら、残った桃と、かなり血まみれになった桃の皮とナイフを籠に一緒にしまうと、それを抱えて部屋を出て行った。
ひとり残されたウォルセンは、深く深く息をついた。
「今日は、って……なんだよ」
考えるまでもない——あの少年は、またここに来るつもりなのだ。
「やめろよ……もう、会いたくなんかないのに……」
泣きたいけれど、涙は出なかった。
（いいやつだなんて、思いたくないのに……）
あの少年のせいではないことは、もうわかっている。
優しいのだ。睨みつけて拒絶の意思しか見せない自分に、指を血まみれにしてまで桃の皮を剝いてくれた。
弱った体を気遣って、水で薄めた果汁を、すでに嚥下する力も出ない自分のために、いちいち指で唇を湿らせてくれた。

彼は——とてもとても……自分などとは比べものにならないぐらい、優しいひとなのだ。
そうとわかっても、ウォルセンは彼を恨まずにはいられない。彼への怒りを捨てることが出来ない……筋違いだとわかっていても、なお。
(だから……もう、来るな)
祈るように、ウォルセンは思った。
(来てくれるな……今度会ったら、絶対に僕は……)
「……ひどい言葉を、投げつけてしまうから……」
弱々しいその声は、自分でもわかるほど……震えていた。

ウォルセンの願いも空しく、翡翠の瞳の少年は、翌日——今度は夏みかんを手に現れた。
昨日と同じように、椅子を寝台のそばに運んできて、ナイフで皮を剝き始める。
「やっぱりね、桃は無謀だって、昨日思い知らされたからね」
訊いてもいないのに、少年は笑顔でそんなことを言う。
「母上に指の傷の理由を問いただされちゃってね、昨日のことを話したら、柑橘類が無難でし

ょうって助言してもらったから、今日は夏みかんを持ってきたんだ」

（ここに来るのは内緒だって、昨日言ってなかったか……？）

そんなウォルセンの思いを読んだのか、少年は「そうなんだけど……」と、悪戯っ子のように舌を出して答えた。

本当に不思議なことだが、なぜかウォルセンの思っていることは、少年には筒抜けになってしまうようだった。

「母上なら、知られても大丈夫だから……というか、あのひとに隠し事は通用しないし。君のことを話したら、母上も早く会いたいから頑張って元気にさせなさいって」

その言葉に、思わず首を傾げてしまったウォルセンに罪はないだろう。

いくら記憶を浚っても、昨日の自分と少年のやりとりは、お世辞にも心温まるものではなかったはずだ……少年の誠実な親切はともかく、自分の態度の悪さは自覚している。

いったい、どんな脚色をしたら、少年の母親が「早く会いたい」などと言うような内容になるというのか。

そんなウォルセンの疑問に、あるいは気づいたかもしれない少年は、しかし今度は答えてくれなかった……もしかしたら、捏造話を披露したのかもしれない。

そうこうしているうちに、夏みかんの皮を剥き終えた少年は——さすがに昨日の桃の皮剥き

のような惨事は起こらなかった——やはり深皿の上で、夏みかんの果汁を絞り始めた。
蜂蜜まで持参しているあたり、やはり大変な気配りのひとである。
そうして、銀の匙を取り出すと、蜂蜜を加えた果汁をくるくるとかき混ぜ、果汁をすくってウォルセンの口元に持ってきた。
「はい、口あけて？　毒じゃないのがわかるように銀の匙にしたんだよ。それとも僕が先に呑んだ方がいい？」
突然、予想もしていなかったことを告げられ、ウォルセンは思わず目を瞠った。
（毒……？　毒って……!?）
なぜ、そんな恐ろしい言葉が飛び出してくるのか理解できない。
もしかして、目の前の少年は、食べ物に毒を盛られることを常に警戒して日々を過ごしているとでもいうのだろうか……？
（そんな馬鹿な）
と、思いかけたが、そうでなければ説明がつかない少年の気遣いに、ウォルセンは顔色を変えた。
ウォルセンには、想像もつかないことだったからだ。
安心して食事ができないなど、彼には経験どころか想像したことさえない事態だったのだ。

少年の――マルシアス本家の後継という立場に生まれた者の現実を、まざまざと見せつけられたウォルセンは、自分のこれまでとのあまりの差異に目眩さえ覚えた。

そして、不意に悟る。

そんな世界に、自分もまた放り込まれたのだという事実を。

口にするものすべてに、毒物混入の可能性を疑うのが当たり前の日々――恐ろしすぎる毎日は、すでにこの身を取り囲んでいるのだ！

かたかたと震えそうになる指先を、固く握りしめることで少年に悟られないようにする。

少年にとって当たり前の日常に、いまさら気づいて怯えている自分を知られたくなかった。

心の悲鳴ゆえに、体が食べ物を受け付けなくなってここまで衰弱してしまった自分だけれど、もしかしたら食べることで、命を落としていたかも知れない――その可能性に気づいた途端、ウォルセンはなにもかもが恐ろしくなってしまったのだ。

それは、あくまでもふたりのこれまでの人生の違いがもたらした衝撃に外ならなかったのだが、少年はウォルセンの動揺を別の方向で受け取ったらしい。

明らかに身を強ばらせてしまった彼の前で、彼は匙の中身をきっちり半分、自分の口のなかにおさめて見せたのだ。

「心配いらないよ、ね、悪いものが入っていたら、ぼくも具合が悪くなるから」

それは、自分が毒を盛ったのではないかと疑われていることを前提にした、身を挺しての保証。

完全な誤解だけれど、そう認識しても少年は不快なそぶりひとつ見せないのだ。

どこまでも優しく、そうして寛大なひとなのだ。

それなのに、そんな彼に対する蟠りを、自分はどうしても捨てることができない。

疎ましく、けれど拭いきれない罪悪感を覚えて、ウォルセンは顔をくしゃくしゃに顰め、ようような思いで伝えた。

「そんなこと……勿体ないからしないでいい」

告げて、銀の匙を自ら咥えた。

蜂蜜いりの夏みかんの果汁は、充分な甘みを舌に伝えてくると言うのに……なぜか、その酸っぱさだけが際だって感じられた……。

いくら言っても、少年の訪問は止まなかった。

最初は水で薄めた桃の果汁、次には蜂蜜入りの夏みかんのそれ——。

少年が飽きもせずにウォルセンの部屋を訪れるたびに、口に出来るようになるものは増えていった。

そして、同時にウォルセンの心に抱える重石も大きくなっていったのだ。

その頃には、ふたりの会話も増えていた。どこまでも優しい少年――アシュアイードに心が傾けば傾くほど、ウォルセンの心は軋んだ。

もう、限界だと思った。

アシュアイードは悪くない。

自分がここに連れてこられたのはアシュアイードのせいじゃない。

責めるべき相手はアシュアイードではない。

わかっているのに――そんなことは、いやというほどわかっているのに、自分を理不尽に家族から引きはがした運命やエルセイドや彼に自分の存在を知らしめた人物に向けるべき怒りを、それでも目の前にいるからという理由だけで、アシュアイードにぶつけてしまいそうだ、と。

それだけはしたくない――そう思っていたというのに。

その日、アシュアイードは地雷を踏んだのだ。

故意か否かはわからないが――。

その日、ようやく粥を口にできるようになったウォルセンに、心底嬉しそうに告げたのだ。
「まだまだだけど、血色が戻ってきたね。よかったよ、それでこそ、僕の弟だ」
もっとふくふくになったら、きっともっと可愛いよね——。
悪意などかけらも感じ取れない素直な言葉——けれど、ウォルセンにとっては決して聞き逃しにできない単語が、そこには含まれていたのだ。
ずっと——忘れかけていたこと。
そう……マルシアス家当主エルセイドによって、無理矢理この屋敷に引き取られ、勝手にマルシアス家本家の次子とされた——事実が。
「僕はあんたの弟なんかじゃない！」
今更否定しても意味ないことは、ウォルセンだとてわかっていた。
それでも、どうしても——なにがあっても、それだけは認められないことだったのだ。いや、違う。
心はもう、仕方ないと半ば諦めていて……戸籍上の兄となったアシュアイードの大きすぎる優しさに触れてしまっては、もう嫌いだと自分に言い聞かせることもできなくて。
でも。
それでも。

この現実を受け入れてしまったら……『聖印の子供』としての義務まで受け入れなければならない——求められる答えなど、自分は持っていないというのに！

「ちがう……違う！」

だから、ウォルセンは決してこの現状を受け入れるわけにはいかないのだ。

だのに、その日のアシュアイードはいつものようにウォルセンの心中を読み取ってはくれなかった。

「でも、父上がそう決められたんだから、君は僕の弟なんだよ。それで、弟っていうのは、兄の言うことをきかなくちゃいけないんだよ」

後に聞いたところによると、一人っ子だったアシュアイードは、降って湧いた弟の存在に、このころ浮かれていたのだという。

しかし、そんなことは知らないウォルセンにとって、アシュアイードの無邪気な物言いは癇に障るものでしかなかった。

「突然、なにを言い出すんだよ!? それは確かにあんたには世話になったけど……でも、だからってあんたやあんたの父親の思い通りになるつもりなんか……」

ない、と言い切る前に、アシュアイードに先手を打たれた。

「顔色が悪いね？　もしかして、熱がある？」

そう言い、無造作に手を伸ばしてきたアシュアイードを、ウォルセンは怒りと苛立ちのままに睨みつけた。

悔しいことに図星だったが、それを理由に退くつもりはなかった。

決意をこめて、じっとアシュアイードの目を見つめ返した。

だが、翡翠の瞳の少年は、それを意に介する様子も見せず、ウォルセンの額に手を当てた後、彼の栗色の髪をくしゃくしゃとかき乱した――。

それはそれは嬉しそうに。

その優しすぎる感触に、ウォルセンはそれまで堪えていた激情を彼にぶつけずにいられなかった。

「お前の弟になんてなるつもりはない。なんなんだよ、この家は!? 勝手に跡継ぎでも何でも決めればいいだろう、僕を巻き込むなよ!? 僕を勝手に連れてきたくせに……あげくに『約束の地はどこだ!?』なんてことばかり訊いてきて……知らないよ！ そんなの僕の知ったことじゃない！ なのに……」

思ったことの半分も、実際に声にはできなかった。

なのになぜか不思議なことに、その言葉のすべてを、アシュアイードはすくい上げてくれたのだ。

「そうか……それは酷いよね」
初めてウォルセンの心に添った言葉をもらえた瞬間、彼の意識はアシュアイードに縫い止められてしまったのかもしれない。
「どうして」
自分は彼を傷つけるような言葉しか投げつけなかったのに――だのに、なぜこんな言葉をくれるのかと。
混乱しながら、ここにつれられてきて初めて得た理解者――かもしれない存在に、ウォルセンの心は大きく傾いた。
だが。
「僕は君のお兄さんになるんだから」
と言われて、途端に身を強ばらせた。
「誰が……」
（本家の人間なんか――）
そう思ったのは、またしても正確にアシュアイードに伝わったらしい。
「僕がお兄さんになるのは、イヤ……？」
彼がどうこうということではなかった。

単に、ウォルセンにとって、マルシアス家が――イヤだったのだ。
声には出さなかったが、その思いはやはりアシュアイードに伝わったらしい。
「……そうか」
とつぶやいて、彼は新たな提案をもちかけてきた。
「じゃあ、君のお兄さんになることは諦める……その代わりに」
と、アシュアイードは続けた。
「君の荷物を僕にくれない？」
なにを言われているのかわからず、目を瞠ったウォルセンに、アシュアイードは告げた。
「僕が約束の地を見つけてあげる……君の代わりに。だから……君が僕のことをお兄さんと呼ぶのがイヤなら……せめて、友達になって？」
告げられた提案に、ウォルセンはもうかぶりをふることができなかった。
ずっとこの家を、連れてこられたこの環境を拒絶しつづけてきた。それが無力な――力を持つ大人たちを前にして、無力なウォルセンにできる唯一の抵抗だったのだ。
けれど、アシュアイードという存在を知って、そのひとに触れて。
逆恨むことしかできなかった自分を受け入れて、理不尽だと感じたはずなのに、そんなことは一言も口に出すことなく。

それどころか、周囲から求められる――もしかしたら、自分が果たすべきかも知れない難問さえも引き受けて。

なのに、求めるのは『友情』だけなのだ。

ただただ胸が熱くて、言葉など出てこなくて。

ウォルセンは真っ直ぐに、出来たばかりの友人に両腕を伸ばした。

彼の体を抱きしめるために――。

# 6

ウォルセンがマルシアス本家に完全に馴染むには、やはり多少の時間を要した。本家の流れを汲むとはいえ、半ば忘れられていた家で生まれ育った彼の認識は、本家で生き抜く上では甘すぎたのだ。

アシュアイードの手を取り、アシュアイードとともに生きることを誓ったウォルセンが、だから最初にその身にたたき込まなければならなかったのは、上流階級における常識というものだった。

しかし、これが難航を極めた。

それというのも、彼がこれまでの人生で培ってきたものと、新たに受け入れなければならないそれとの間には、それこそ彼我の差があったからだ。

少なくともウォルセンは食事ごとに毒の混入を警戒することなど思いもよらないことであったし、誰かと会話する度に自らの本音を隠しながら相手のそれを引き出す必要性など覚えたこ

ともなかったからだ。

しかし、アシュアイードのそばで生きていく以上、それらは最低限必要なことだった。

我が身を守る上でも、それ以上にアシュアイードを守り抜く上で、それらを飲み込み消化することは絶対に必要なことだった。

なにしろ、マルシアス家を敵視する勢力は数えきれぬほどに存在するのだから。

ディエーンにマルシアス家が忠誠を誓ってより、すでに四世紀が過ぎている。

にも拘わらず、マルシアス家は新興の大貴族として今でも王家から警戒されているのだというのだ。

初めてその話を聞いた時には、ウォルセンは「開いた口がふさがらない」状態だった。

「なに、それ？　ディエーンの中枢って、疑心暗鬼の権化が揃っているわけ？」

四世紀以上仕えている家に対して、警戒しつづけるなど、当時のウォルセンにとってはそうとしか思えなかったからこその台詞だったのだが、これに対してアシュアイードが苦笑混じりに説明してくれた内容が内容だっただけに、以降、第一印象だけで感想の言葉を口走るのはやめることにしたのだ。

そう……ディエーンという国が抱え込む闇の一端を教えられたからこそ。

ウォルセンは知らなかった——ディエーンの歴史はそれなりに知っているとは思っていた、

少なくとも書物に記された内容に関してはかなりの部分を把握していると自認していたから、それらが政治的勝利者によって都合よく改竄された代物だと知らされた時の衝撃は小さくはなかった。

それを教えてくれたのは、意外にもアシュアイードの母親で、家事が得意な事でしか知られていないアライセイダだった。

その彼女によれば、「マルシアスと名を変える以前のことまで含めれば、三度も主を乗り換えた一族ですもの、どうしたって警戒するでしょう」というものだったが、当然のことながら、まだ十に満たないウォルセンには理解不能な言葉だった。

そんな彼に懇切丁寧に教えてくれたのは、当たり前というか、ほかにいなかったというか……アシュアイードだった。

「まあ、ね。うちも乗り換えるときはかなり大胆にやったみたいだから、警戒するなってほうが無理だろうけど、それ以上にディエーンというのが複雑でねえ」

苦笑まじりの戸籍上は義兄にあたるひとの言葉に、思わず首を傾げたところ、褐色の髪のそのひとは、ふう、と仕方なさそうに息をついて、教えてくれた。

「ディエーンは古王国と呼ばれている……その理由は知っているかい？」

「それは……王朝が代わっても国名を改めることをしないから……」

間違ってはいないと確信できる答えであっても、アシュアイードやアライセイダを前にして口にするとき、どうしても緊張してしまう。

それは、間違っていることを指摘されることが怖いのではない。

間違ったことに対して、彼らが自分に失望するのではないかという――まだ起こってもいないことが恐ろしくてならないからだ。

だから、このとき、アシュアイードが「そう。正解」と頷いた時点で、ウォルセンはほっと息をついてしまった。

次に投げかけられる問いという名の刃の鋭さに気づきもせずに。

「では、なぜディエーンは王朝が交代しても国名を変えないのか――その答えは？」

一撃をかわした次の瞬間、別の一撃を受けた。

そうとしか言いようのない衝撃だった。

「それは……」

ディエーンはディエーンだから――と答えかけて、それは答えにならないことに気付いてやめた。

では、答えとなるものは、他にもあるのだ。

それを自力で見つけることが、いま、自分に求められていることなのだろうとウォルセンは

思った。

けれど、どれほど脳裏を浚っても、この問いに対する答えは自分の頭の中にはなかった。

だから、ウォルセンはそのことを正直に打ち明けることしかできなかったのだ——かなりの抵抗感を覚えつつも。

「……わかりません」

その答えに、質問者はにこりと笑った——はっきり言って、むかつくものでしかなかったが。

「よくできました」

にこやかな笑顔は、ウォルセンの苛立ちをいや増したものの、別の一方で「ああ、好きだなあ」などと思ってしまうのだからタチが悪い。

本当に、この友人は飴と鞭の使い分けがうますぎる。

この後の自分の予定を思い浮かべながら、ウォルセンは恐らく甘やかされるであろう数時間後の自分を想像し、諦めの息を洩らした。

ここで説明しないと言うことは、アシュアイードは私的な時間で自分に懇切丁寧に説明してくれるに違いないのだ。

もしくは、全部自分で考えてみろ——と投げ出してくるか。

どちらだろう、と、どきどきばくばくする心臓を抱えながら、ふっと過去の在りし日を、つい懐かしく思ったウォルセンに罪はないだろう……多分。

濃褐色の髪の少年が、なんとも興味深げに手元を覗きこんでくるのを、ウォルセンは乱暴な仕草で追い払おうとした。

「見ないでよ」

あっちに行って――お願いだから。

仕草とは裏腹に、声は今にも泣き出しそうなか細いものだった。

それもそのはず、ウォルセンは決して見られたくない相手に、絶望的な失敗の現場を目撃されてしまったのだ。

「綺麗な縫い目じゃないか」

くすくす笑いながら、アシュアイードが慰めにならないことを言ってくる。

「ただし、糸が通ってたら、の話だけど」

「わかってるよ！　玉結びを忘れてたんだからしょうがないだろ！　ううう、せっかく均一に

真っ直ぐに縫えたと思ったのに……」

糸の端を結んでいなかったせいで、糸は綺麗に布を抜けてしまった。

後に残るのは綺麗な『針の跡』ばかりである。

がっくりと肩を落とすウォルセンの肩を、アシュアイードがやさしく叩いた。

「だけど、ずいぶん上達したじゃないか。うん、この縫い目なら、雑巾以外にも使い道はあると思うな」

声は穏やかであるけれど、ちっとも喜べない内容に、ウォルセンは唇を尖らせた。

「アッシュの注文が細かすぎるんだよ。そりゃあ、お世辞にも綺麗な縫い目とは言えないけど、それでも一所懸命縫い上げた手巾、雑巾以下なんて本人に向かって言う!? あの時は本気でアッシュのこと憎かったんだからね！」

思い出すのは三ヶ月前、生まれて初めて持った針で、アシュアイードのための手巾を縫い上げた直後のことだ。

指を針で血まみれにして、ようやく完成させたというのに、この年上の友人は、「雑巾にも使えない」と言い切ってくれたのだ。

「馬鹿だなあ、ディー。本人のいないところでそんなことを言ったら陰口になってしまうじゃないか。ちゃんと君に率直な意見を言ったんだから、そこは感謝すべきだろう？」

一年前、衰弱しきっていたウォルセンに救いの手を差し伸べてくれた時は、神々はきっとこんな姿をしているに違いないと思ったものだが、親しくなってみれば、相手は極上笑顔のいじめっ子だった。

「陰口じゃないのは嬉しいけど……せめてもう少し歯に衣着せて欲しかった……」

「そうは言うけどねえ、あれを評して、どう歯に衣を着せられるのかと言うと……」

「わかったから、もう言わなくていい！　せめて、じゃあ黙っててよ。アッシュにけなされると、的確すぎて落ち込むんだよ」

そう――それは、縫い物に限ったことではない。

文字が汚いだとか絵心がないだとか、自分でもわかっていることを、アシュアイードは誰もが納得するような言葉を選んで評してくれるのだ。

ある程度以上親しい相手に限定してのことだということを知らなければ、嫌われていると勘違いするところだ。

「的確、いいじゃないか。反省点が浮き彫りになるわけだから、改善しやすいだろう？　それに、僕は金より銀のほうが好きなんだよ」

雄弁は銀――というわけだ。

「……アッシュ。そんなに僕を落ち込ませるの、楽しい？」

思わず声が拗ねてしまう。

だが、そんなことぐらいでアシュアイードは態度を改めたりはしてくれない。

「うん？　だって小さくて可愛い生き物は構い倒したいじゃないか」

果たして、さらに揶揄われて、さすがにウォルセンは本気で頬をふくらませた。

「小さな生き物ってなんだよ！　アッシュだって、僕とほとんど変わらないじゃないか！」

「身長はこの場合、あまり関係ないんだよ。お前は存在そのものが小さくて可愛いんだから。ちなみに僕は綺麗と言われたことはあるけど、可愛いと言われた記憶はないよ」

ぬけぬけとよくも言う――とは思ったが、確かにアシュアイードは明らかに『綺麗』と評される顔立ちをしているから反論できない。

とは言え、男である以上『可愛い』と言われてもちっとも嬉しくはないので、そこだけは主張しておく。

「アッシュ、僕だってねえ……そりゃあ、綺麗とかは言われたことないけど、可愛いとか、そんなに言われたこと……」

「ないとは言えないだろう？」

「そんなのアッシュだけじゃないか」

「いや？　お前が落ち込むからじかには言わないだけで、母上もよく言ってるよ？　そうそ

う、母上にいくら勧められても、髪は伸ばさないほうがいいと思うな。あのひと、お前に一度ドレスを着せたいって言ってたから」

あまりにも衝撃的な言葉に、ウォルセンは愕然とした。

「そ、そんな……あの優しい小母さまが……そんな、ドレス……ドレスって……」

そう言えば、何度か綺麗な髪だから伸ばしてみないかと勧められた覚えがある……確かに。

「ぜ、絶対に伸ばさない！」

「賢明だね」

伸ばしてあらぬ誤解を招くこともないだろうし――。

意味ありげにうんうんとうなずくアシュアイードに、ついにウォルセンの堪忍袋の緒が切れた。

「アッシュ！」

「はい、そこで怒らない。今度こそ、僕が使える手巾を仕上げてくれるんだろう？　どうせなら刺繍も入れてほしいな。そうだな……牡丹とかバラとか……」

初心者に対する要望ではない。

「苦労した挙げ句に雑巾にされるのはイヤだから却下」

「馬鹿だなあ、ほんとに。鉄は熱い内に打つんだよ」

くすくすと、心底楽しそうにアシュアイードが言うのを見て、ウォルセンはもうため息しか出てこなかった。

「鋼になる前に潰されそう……」

「失礼な。こんなに愛情込めて鍛えてあげているのに」

「……痛くない愛情が欲しい」

すん、と鼻を鳴らしながらそうつぶやいたウォルセンに、アシュアイードはにっこり笑って「却下」と切り捨てた。

「骨抜きにする自信があるから、やめておいたほうがいい」

どこまでも勝てない友人に、ウォルセンはもう降参するしかなかった。

差し出された手を取ってから一年——ようやく心から笑うことを思い出した少年は、この日々がずっとつづくと信じていた……いや、祈っていたのかも知れない。

# 7

ファンディア・アクティス・マルス・ラルクティアに初めて会ったのは、ウォルセンが十一歳のときのことだった。

十歳になったばかりの少女は、父親であるラルクティア家の当主ザイオンに伴われてマルシアス家を訪れたのだ。

ザイオンはエルセイドの忠実な片腕であり、侯爵にあくまで忠実な立場を取っているひとであった。そのため、彼からウォルセンは不当な扱いを受けたことがない。

マルシアス本家の養子に迎えられた理由が『聖印』であるゆえに、この屋敷を訪れる者のなかには、ウォルセンへの疑念や悪意を隠そうとしない者も多かった。なかには彼の痣を、刺青に違いないと声高に主張する者までいる。そして悲しいことに、そういった者たちのほうが、数として勝っているのだ。

おかげで些細な嫌がらせは珍しくもなく、ウォルセンはすっかりその状況に慣れてしまって

いたのである。

しかし、慣れたからと言って、完全に平気なわけではない。

だから、悪意を向けることなく、自分をきちんと見てくれる数少ない人間のひとりであるザイオンに対して、ウォルセンは好意を抱いていた。

「ザイオンさま、お久しぶりです」

声をかけられたのは、屋敷の奥まった一画——侯爵家の私室が並ぶ廊下でのことだった。

会釈して挨拶を返すと、ザイオンはウォルセンが胸に抱いている分厚い書物に目を止めた。

「……ほう、『主観経済論』か。ずいぶん難しいものに挑んでいるようだね」

その言葉に、ウォルセンは慌ててかぶりをふった。

「違います、これはアッシュ……いえ、義兄上からの没収品です。あの方は、一度書物に没頭すると頭痛を我慢してまで読み続けるものですから……」

アシュアイードの愛称を思わず口にしてしまい、彼は慌てて言い直した。

いかに好意的に見てくれる相手であっても、いやそういう相手だからこそ、アシュアイードに対して気安すぎると思われるような言動はとるべきではない。

エルセイドもザイオンも、ウォルセンに求めているのは『アシュアイードの忠実にして有能な補佐』であることなのだから。

アシュアイードとウォルセンの間に存在する友情を、今のところはふたりとも否定しようとはしないけれど、だからと言って、無条件にそれが許されたのだと信じるのは危険だと――この四年でウォルセンは学び取っていた。

それをかけがえなく大切に思うなら、守るために慎重に振る舞うべきだと。

弁えている内は、きっと横やりは入らないだろうから。

（少し……失敗した）

内心舌打ちしつつ、彼は話題を変えるべく視線を少女に向けた。

自分と同じか、年下かもしれない少女は、初めて見る顔で、ウォルセンは確かに好奇心を覚えていたのだ。

ザイオンのそばにぴたりと寄り添う少女は、褐色の巻き毛が愛らしい、大きな薄茶の瞳が印象的な可愛い顔立ちをしていた。

きらきらと輝く瞳に浮かぶ強い光が、彼女の気の強さを物語っている。

「……お嬢さんですか!?」

目元がザイオンと似ていたため、確認の意味で尋ねたところ、男は「ああ」と首肯した。

「ファンディアだ。久しぶりにアシュアイードさまにお会いしたいとせがまれてな、つい同行を許したのだが……もしかして、体調を崩されておいでなのかな!?」

アシュアイードは、ずば抜けた頭脳と美貌の主であるのだが、生憎健康な肉体だけは天から与えられなかった。

常に病床にあるというわけではないのだが、ふとしたことでたやすく寝台の住人と成りはてるのだ——その原因のほとんどが、彼の過剰なまでの学習意欲にあるわけなのだが。

知識を吸収することに夢中になるあまり、我が身を振り返らない悪癖の持ち主なのだ。

「……いえ、今回は眉間を指でほぐしているところで書物を取り上げましたから、頭痛には至っていないと思います。アライセイダさまが無理矢理休憩のお茶を淹れてらっしゃいましたから、お部屋で寛いでおられるところでしょう」

ウォルセンの答えに、「そうか」と答えるザイオンの双眸が安堵に緩む。

「そうか……ならば、お邪魔してもかまわないかな？　ファンディア、おいで」

ザイオンの言葉に、少女が初めて愛らしい口を開いた。

「はい、お父さま」

そしてザイオンは「ありがとう、助かったよ、ウォルセン」と言って、その場から立ち去ってしまった。

そのときは——すぐには違和感に気付くことができなかった。

ただ当惑を覚えたのは確かだった。ザイオンは娘である少女のことをウォルセンに紹介した

が、その逆のことはしなかったのだ。
まるでウォルセンとファンディアに、関わりを持たせまいとするかのように――。
しかし、それは穿ちすぎだろう――とウォルセンは浮かんだ考えを否定した。
ザイオンはきっと、体調を崩したアシュアイードのことが心配なあまり、いつもの完璧なまでの気遣いを忘れてしまっただけなのだ、と。
彼のエルセイドとアシュアイードに対する執着と心酔ぶりをよく知るウォルセンにとって、その考えはなんら無理のない自然なものだった。
さらに――。
その後、アシュアイードの口から聞かされた衝撃の事実故に、彼の記憶から微かな違和感は吹き飛んでしまったのだ。
ファンディアは、アシュアイードの許嫁に決まった娘、だった――。

「ザイオンさんのお嬢さんに会ったよ。すごくかわいい子だよね!?」
将来のための勉強も兼ねて、領地内の問題の――さして重要ではない――書類をアシュアイ

ードとふたりで片付けながら、ふと思い出してウォルセンは口にした。
模擬書類でない以上、真剣に取り組まなければいけないことはわかってはいたけれど、処理に必要な計算が単調なくせに膨大な量があり、気分転換を切実に必要としたためだ。
「へえ!?」
しかし、アシュアイードは気のない素振りで、身の入らない答えを返すばかり。
退屈、とその綺麗な顔には大きく書いてある。
そんな顔をしている時のアシュアイードは要注意であることを知悉しているウォルセンは、少しでも親友の意識を退屈から気をそらさせるために言葉を重ねた。
「可愛いじゃない！　薄茶の瞳がきらきらしてて……言葉は交わさなかったけど、僕は可愛いと思ったな」
しかし、アシュアイードの意識は退屈から解放された様子を見せない。
「……ああいう感じの子が、好きなんだ？」
どうでもいいような口調で問いかけられた瞬間、「そんなわけじゃないけど」と答えるより先に、脳裏に浮かんだ少女の強い眼差し――。
なんだかわからないけれど、それは自分には持ち得ないもので……だからだろうか、見とれてしまった。

そんなことを思い出したものだから、即座に否定できなかったのが、ウォルセンにとっての不幸だった。

（……しまった……）

アシュアイードは――とても意地が悪い。

からかう種を見つけた時、決して見逃してはくれないのだ。

「知らなかったな、ディーはてっきり、もっとおとなしやかな感じの女の子が好みなんだとばかり思ってたから……そうか、ファンディアみたいな感じの子が好みなのか……」

放っておくと、どんどん勝手に話を作り上げていきそうな友人の言葉に、ウォルセンは真っ赤になって否定した。

「ちょっ！　勝手に話を作らないでよ！　そうじゃなくて……本当に、そんなんじゃなくて！　瞳に強い力を宿してたから……！　そういうとこ、ザイオンさんもそうだけど！　だから、いいなぁって……単にそう思っただけで」

弾けるような、生命の力に出会った時、ウォルセンはほとんど無条件に賛美の念を覚え、その持ち主に好意を抱いてしまう。

それは、自分が抱えるどうしようもない弱さに起因するものだ。

ウォルセンは自らの心が弱いことを知っている。強さを持っていたなら、いかに理不尽な運

命に晒されようと、たやすく自らの命を放り出すはずなどない。

だが、現実の自分はどうか!?

家族から引き離され、わけのわからぬ問答と、周囲からの圧迫感にあっさりと白旗を揚げ、安易に死への道を選んだ。

自殺することこそなかったが、あの折の摂食障害は命を放棄する行為だった。

今生きているのは、あの場にアシュアイードが来てくれたからだ。

彼が、諦めずに唇を果汁で湿してくれたから——今の自分がある。

だから、本音を言うなら、ウォルセンにとって一番眩しい、大事でかけがえのない存在はアシュアイードなのだ。

大事で譲れないのはアシュアイード以外にいないのだ。

「まったく、君と来たら……」

呆れたように、アシュアイードがつぶやいた。

「殆どの人間の本質を一瞬で見抜くくせに、それ以上のことをしない。それがいかに……いや、やめよう。多分、それは君自身が気付かなければならないことなのだろうから。だから、いまはひとつだけ、言っておくよ」

す、とアシュアイードの右手がウォルセンの頬を撫でた。

「……アッシュ!?」

「あの子は……ファンディアは駄目。だって、あの子は……僕の許嫁だから」

告げられた言葉の意味が、すぐには理解できなかった。

(駄目って……なにが!?　ファンディアは確かにきらきらしていたけど、眩しいって感じただけで……なのに、なにが駄目なんだって!?　ええっと……「僕の許嫁」って……それって、それって!?)

頭は完全に混乱状態にあった。

だからこの時、ウォルセンにできたことといえば――。

「え、えええぇぇぇっっ!?」

……絶叫することだけだった。

ちくちく、ちくちく、ちくちく、ちくちく。

またしても熱を出した親友のそばで、刺繍に勤しむウォルセンの指捌きは相変わらずの見事さである。

しかし、その人物の放つ気配はといえば……剣呑この上ない。

「ディー」

いつもとは違い、こちらの機嫌を伺うように、ひとつ年上の親友が声をかけてくるが……冷たい対応で一蹴する。

「なに!?」

「いや、だから……ディー!?」

怒ってる――!?

と、言外に問いかけてくるのが腹立たしく、ウォルセンは縫いかけの刺繍を床に放り投げて答えた。

「怒るに決まってるだろう!? ああ、もう信じられない！ こんな高熱だしときながら、傍目には全然そう見えないだなんて！ アッシュ、もし俺が気づかなかったら、もしかして平気な顔して予定通り五件もの面会こなすつもりだったのか!?」

「……いや、さすがに」

否定したものの、答えるまでに横たわった微妙な間がなにより雄弁な答えとなった。

「もう、いい！ アッシュ、お前、今日は寝台の住人決定！ お前の予定はわかってるから……いつも通り、丁寧に面会『お断り』してやるよ。だから、しっかり休んで体力戻せ」

一方的に言い切り、ウォルセンはアシュアイードを布団に押し込んだ。
なおもアシュアイードはなにかぶつぶつつぶやいていたが、ウォルセンは聞く耳持たずで部屋を出た。
体調不良のアシュアイードに代わって、片付けるべき書類に取りかかるためである。
エルセイドの思惑にまんまと乗せられたようで癪には障ったが、ここ数年というもの、ウォルセンは確かにマルシアス家後継としての経験を着実に積みつつあるアシュアイードの傍らで、その補佐として働いてきたのである。
穴埋めぐらいなら充分務められることを十全に知っているはずのアシュアイードがなぜ、今日に限って無理矢理にでも自ら動こうとしたのか――この時のウォルセンは想像する事さえできなかった。

（えーっと、確か今日は決済の書類がけっこうあったはずで……まあ、だからアッシュも無理をおしてでもって気になったんだろうけど……そういう日は、せめて面会を減らせよな。おれが目を離すとすぐに勝手に予定を詰めるんだから……秘書官のルージャンには、もっときつく

言いつけておく必要あるかな。まったく、体力ないのに無茶ばっかりして……）

心配するこちらの身にもなってほしい――と、切実に思う。

だが、無茶をするなとは口が裂けても言えないあたりが、なんとも悔しい。

ディエーン王国の南部一の大領主であるマルシアス家の次期当主として、アシュアイードが背負わなければならない責任は決して小さくはない。

自分や秘書官が補佐してはいるが、肩代わりできるのは、ほんの一部分だけだ。そして、それだけの重責を果たさなければ、周囲から次期当主として認められないというのもまた事実である以上、アシュアイードは無理をせざるを得ない。

それがわかっているから、ぎりぎりまでウォルセンは小言は言っても、無理矢理止めようとはしないのだが、今日ばかりは特別だった。

どんな裏技を用いたかは知らないが――あの万年病人は、自分の体調の悪さを隠すことにかけては天才的なのだ――額からは熱を感じられなかったものだから、うっかり見逃しそうになったのだが、よろけた拍子に摑んだ手首の脈拍数が尋常でないことに気づいた途端、怒鳴りつけていた。

どう考えても通常の二倍近かったのだ。

あんな体で起き上がれるはずがないというのに、一見したところ平気そうな顔をしていたの

だから、化け物じみた演技力だと思う。

（本当に、もう……負けず嫌いなんだから）

決して弱みを見せようとしない強情さは、大きすぎる一族を率いて行く上で大切かもしれないが、アシュアイードの場合、それが過ぎているように思えて時々不安になる。

（張り詰めないでいられるような誰かがいてくれたらいいんだけど……）

できれば異性で――同性に対しては、どうしても意地を張ってしまうだろうから……とそこまで考えて、ウォルセンはため息をついた。

「いたらいたで、まずいか……」

なにしろ、アシュアイードにはすでに婚約者がいるのだから。

しかも、一緒にいて癒されるとは言い難い……いや、アシュアイードを一途に想っているのは確かだから、かわいいといえば言えるのだが。

ただ、小型犬を想わせる言動の多い少女から、安らぎを貰うのは難しいような気がするのだ……もっとも、自分が彼女に蛇蝎のごとく嫌われているから、そう感じるだけなのかもしれないが。

それでも、彼女やその一族であるラルクティア家一党が願う通りに、ウォルセンはアシュアイードから離れるつもりはないから、友好関係を築くのは無理というものかもしれない。

彼らが自分を嫌うのは、アシュアイードを陥れ、次期当主の座を乗っ取ろうとしているのだと信じてのことなのだから。

マルシアス家当主であるエルセイドが、次期当主はアシュアイードだとはっきり明言しているにも拘わらず、彼らが頑なに自分を排除しようとする裏に、一族に根強く残る聖印信仰があることはわかってはいるのだけれど。

それでも、ウォルセンは以前ほど、自らの痣を厭わしくは思っていなかった。

理不尽な思いも味わわされたが、それなくしてはアシュアイードというかけがえのない友人を得ることはできなかったのだから、と。

この日までは……否、翌日の朝までは、確かにウォルセンはそう思っていたのだ。

アシュアイードの熱は、翌日になっても下がらなかった。

引き続き寝台に縛り付け、ウォルセンは書類の山に埋もれることとなった。

そんな最中、マルシアス一族中でも古参の名家――アタラクシア家の当主名代の訪問が告げられた。確かにその予定は入ってはいたが、昨日の時点でアシュアイードの体調不良を伝え、

面会は断っていたはずだった。
しかし、アタラクシア家の当主名代は、執拗に代理であるウォルセンに会いたいと訴えているという。
この時、ウォルセンが思ったのは――。
（あー、アッシュの婚約者のラルクティア家の縁戚だったような……!?　だったら、嫌み三昧か……ううう。あれ!?　だけど親しいって話は聞いてないよな……うーん、系図は頭に入ってるけど、細かい関係まではまだ把握しきってないんだよなぁ。でも、まあ、いっつもこの手の輩はアッシュが相手してくれてるとは言っても、これからずっと頼りっぱなしにするわけにはいかないし、ここは頑張ってお相手するしかないか……うーん、だけど気が重い……）
そんなことを思いつつ、客室へ向かったウォルセンは、扉を開いた瞬間、驚愕に心臓が凍り付くかと思った。
そこに、跪いていたのは、忘れようにも忘れられない――過去の幸福を壊したあの少年の成長した姿だったからだ。
『なんだよ、この包帯。怪我してるのか!?』
『へえ、変わった痣だな』
『なんで内緒にしなくちゃならないんだ!?』

『まあ、そこまでお前が言うなら誰にも言わないけどさ』

——そう、約束したはずなのに、あっさりと秘密を自らの父親に明かしてくれた人物が、満面の笑みをたたえてウォルセンを見つめていた。

そして——。

彼は告げたのだ——臆面もなく。

「ようやくお会いできました……我が君。聖印を受け継いだ貴方様こそが、我が一族の正当なる後継者。脆弱なるあの若造などものの数ではございません、貴方様を支えるためになら、我らは骨身を惜しみませぬ……いかようにもお使いくださいますよう……」

大地そのものが崩れたかと思った。

それほどの、衝撃だった。

我が君!?

それはいったい誰のことだ!?

脆弱な若造!?

それは誰を指すというのか!?

自分を支える!?

なんのために!?

ぐるぐるとさまざまな言葉が脳裏を駆けめぐる。そうして、認めたくはなくとも、疑問の形を取った時点で、答えは導き出されてしまうのだ。

すなわち。

自分とアシュアイードは、本人同士の意思はどうあれ、マルシアス家後継を巡る敵対関係にあるのだと――！

# 8

ウィーカルド・ナスター・オルス・アタラクシア――。

栗色の髪と暗い緑の瞳を持つアタラクシア家当主名代である青年は、そう名乗った。

（そうだ……ウィーカルド……そういう名前だった……）

七歳の自分に対して兄貴風を吹かせ、さんざん振り回してくれた年上の少年は――。

家格の違いを無意識に振りかざし、どこまでも優位者として振る舞い、ついには自分の痣までも傲慢に暴露した――言うなれば、元凶とも言える存在。

けれど、マルシアス家に来てアシュアイードと出会い、その補佐となるべく暮らしていくうちに、すっかり忘れ去っていた。

その少年の成長した姿が、いまウォルセンの正面にあった。

（いまさら……）

何の用か――とは思わない。

アシュアイードの体調不良を伝えたにも拘わらず、強硬に代理たる自分に面会を求めてきたのだ。よほど緊急の用件があるに違いないのだ。

だが、それはあくまでアシュアイードに対するものであるはずだ――少なくとも、この部屋に入るまで、ウォルセンはそう信じて疑わなかった。まさか、ウィーカルドに跪かれるなどとは思いもかけなかったのだ。

「お久しゅうございます、ウォルセンさま」

さらに信じられない言葉を聞いた、とウォルセンは思った。

（さま!?　このひとが、さま付けでおれを呼ぶだなんて、いったい何の冗談なんだ!?）

あまりに意外すぎる現実に、ウォルセンの頭は軽く混乱していた。

ともかく、いつまでも跪かれていては落ち着かない。

「え、と……その、お立ちください、ウィーカルドさま。ア……義兄上はともかく、わたしにそのような礼を取っていただく必要はありませんから」

慌ててそう言うと、ウィーカルドは弾かれたように顔を上げた。

その暗い緑の瞳には、紛れもない驚愕の色があった。

しかしそれは一瞬のこと、すぐにそれは沈痛なものに取って代わられた。

「おいたわしい……」

痛みに耐えるような声で紡がれた言葉は、しかしウォルセンには理解できないものだった。
（おいたわしい……!?　何がだろう!?）
少なくとも青年に同情される理由に心当たりはない。
思わず首を傾げる彼に、ウィーカルドは小さく息をついた。
「聖印の子たるあなた以上に、我らが尊敬を捧げる相手など存在いたしませんよ」
そう告げる青年の瞳には、背筋がぞくりとするような、異常な熱が籠もっていた。
ああ、またあの問答が繰り返されるのか――うんざりした気分で、ウォルセンは内心舌打ちした。
（約束の地なんて知らないって！）
何度そう言っても、信じないひとは信じないのだと、わかってはいても気は塞ぐ。
「……わたしは、ただ偶然痣を持って生まれてきただけの子供です。不思議な力など持ちませんし、約束の地のことも……」
だから『聖印の子供』などではないのだと、ウォルセンは訴えかけようとした。
しかし、ウィーカルドはなぜか、意味深長な笑みを浮かべると、ますます奇妙な熱を帯びた眼差しを向けてきた。
「不思議な力などお持ちにならない……!?　ああ、そういうことにしておくように、侯爵が命

じられたのですね!?　ですが、わたくしにお隠しになる必要はございませんよ、ウォルセンさま」

わたくしは、知っておりますから――。

つづけられた言葉に、どくりと心臓が大きく跳ねた。

「……な、にを……」

情けなくも声が震えた。

そんなウォルセンの様子に、怯えの気配を感じ取ったのか、ウィーカルドの声はことさら優しげなものへと変化した――安心させるつもりなのだろう。

だが、次いで耳に届いた内容は、到底安堵を呼ぶものではなかった。

「幼きあの日、わたくしはウォルセンさまが風霊と戯れてらっしゃるお姿を拝見させていただきました……あの地にはない白い花を、風霊たちはウォルセンさまに捧げておりました……」

青年の声は陶然とした響きに溢れ、思い出をたどるように細められた双眸は、夢見るかのごとく蕩けていた。

ざっ、と血の気が引いた。

(見られていた!?　いつ!?)

嘘だと思いたかったが、白い花という言葉に記憶が刺激された。

それは……アタラクシア家の一行が、ウォルセンの家に着いて間もないころ——ウィーカルドと顔を合わせる前のことだった。

食卓に飾る花が寂しいと、母がぼやいていたのを聞いて、精霊たちに『お願い』したのだ……数日つづいた雨のせいで、花壇の花は散ってしまっていたから。

風霊たちが笑いながら持ってきてくれたのは白い百合——。

はらりはらりと、空から降ってくる百合を、一所懸命受け止めたのを覚えている。

(あれを……見られていただなんて!)

真っ青になって、ウォルセンは唇を噛みしめた。

精霊と親しむ不思議の力——ウォルセンが持つ異能を知る者は、マルシアス家にあっても限られる。

侯爵エルセイドとアシュアイードと義母——実の両親を除けば、その三人のみだった。

だからこそ、無用な混乱を招かぬようにと、力のことは秘めてきたのだ。『聖印の子供』として扱われることをウォルセンが厭っている以上、その判断は正しかったはずだ。

しかし——。

その秘密はとうに知られていたのだ——聖印を暴かれるより先に!

(どうしよう……どうしたらいい!?)

ウィーカルドに口止めしても無駄なことは証明済みだ――いや、恐らく彼はすでに異能のことも父親に告げているだろう。

絶望が、黒いシミのように胸の奥に広がっていく。

異能を持つ『聖印の子供』として、また追られるのだろうか――約束の地を示せ、と。

（アッシュ……！）

心が悲鳴を上げそうになる。

だが、そんなウォルセンの様子をどう受け取ったのか、ウィーカルドはさらに意外な――とんでもないことを言い出したのだ。

聖印を持つウォルセンこそが、正当なるマルシアス家の後継だ、と。

自分を『我が君』と呼んだ青年の言葉は、心を凍り付かせるばかりだというのに、それに気付くことなく、青年は惨いそれを連ねていくのだ。

アシュアイードのことを、脆弱な若造だ、と。

自分を支えるためには、骨身を惜しまぬと。

自分とアシュアイードは敵なのだ――と。

……心が、絶望という名の奈落に呑み込まれるのを、ウォルセンは感じていた。

いつウィーカルドが退室したのか、ウォルセンは覚えていなかった。
気付けば、接客室のソファにひとり腰を下ろしていたのだ。
恐らく衝撃のあまり自失していたのだろう。
（……アッシュに、知らせないと……）
ウィーカルドが――ひいてはアタラクシア家が考えていることを。
あの青年の口ぶりでは、本気でアシュアイードに危害を加えかねない。そんなことは到底許せることではないのだから。
のろのろと立ち上がり、ウォルセンはアシュアイードの部屋を訪ねるために接客室を出た。
声がかけられたのはその直後だ。
「アシュアイードさまならお休みになったところよ」
冷ややかな、棘を隠さぬ少女の声に、そちらを振り返ると――ファンディアが立っていた。
刃のような鋭い光を宿した瞳は真っ直ぐにウォルセンに向けられている。
それは、明らかに敵を見る眼差しだった。
出会って以来、嫌われていることには気付いていたが、ここまで強烈な視線を投げかけられ

たことは初めてで、彼は困惑を隠せない。
だが、すぐにその理由は知れた。
「……アタラクシアのウィーカルドはもう帰ったのかしら!?」
問いではなく、確認を取るために投げかけられたと知れる言葉に、ウォルセンははっと息を呑んだ。
ファンディアの瞳には、燃えるような憎悪が宿っていた。
「恥知らず」
言の葉の刃が、心臓に突き立てられる。
「ファン……」
「あれほどアシュアイードさまによくして貰いながら……そのアシュアイードさまの代わりに、よりにもよってアタラクシア家の者と会うだなんて！　どうしたら、そこまで厚顔になれるのかしら、いっそ不思議なほどだわ！」
叩きつけられた言葉で、ウォルセンはようやく悟った。
ファンディアは……そしてラルクティア家は、アタラクシア家の狙いを知っているのだ。アシュアイードではなくウォルセンを次期当主に押し上げる心づもりであることを！
（ああ……だから、だったのか……）

ここ数年、目に見えて距離を置くようになったザイオン――顔を合わせる毎に、不快そうに顔を顰めるようになったファンディア。

彼らにとって自分は、大切なアシュアイードを脅かす障害だったのだ。

「……違う。違うんだ……」

自分はアシュアイードと敵対するつもりなどはないのだ。

それだけは、わかって欲しくて言葉を続けようとした彼に、しかし少女は容赦ない言葉を寄越した。

「あなたの意思などどうでもいいの。アシュアイードさまのお許しさえあれば、今すぐにでもあなたなど排除してしまうのに……」

そう言った後、少女は悔しげに唇を噛みしめた。

小さな肩が、小刻みに震えていた。

「……どうして、アシュアイードさまは……」

つぶやくと同時に、ファンディアが俯いた。

そうして、絞り出すように一言告げると、もうこちらを振り返ることなく玄関に向かって立ち去った――立ちつくすウォルセンをひとり残して。

「アシュアイードさまになにかあったら、わたくしはなにがあってもお前を殺すわ」

呆然としたまま、ウォルセンは自室に戻った。

ふらつく足取りは、傍目にも不審を誘うものであったろうが、幸いなことに家人の姿はなく、彼は部屋までたどりついたのだ。

がんがんと頭痛がする。

ウィーカルドの言葉が悪寒とともに甦る――。

『貴方こそが我が一族にとっての至高の光……約束の地への道しるべ……傍流に生まれついたことがいかほどの障害となりましょうか。現に貴方の資質の輝きは、疑うべくもない』

貴方こそが――。

続けられた言葉は、思い出したくもないというのにしっかりと脳裏に刻みつけられていた。

どうしても看過できない内容を孕んでいたがゆえに。

『あのような病弱な子供のためなどに、その輝きが世に出られないなど、到底許せることではございません』

そう言って、真っ直ぐに見上げてきた青年の眼差しが忘れられない。

歪んだ熱を帯びた——恐ろしいそれが。

思い出しただけで、ぶるりと悪寒に身が震える。

(恐ろしい……あれは、放っておいてはいけないものだ)

十三歳のウォルセンにそう確信させるほど、あの眼差しは危険に満ちたものだった。

自分にとって、ではない。あの男の言う「あのような病弱な子供」……アシュアイードにとって、だ!

(アッシュ)

大事な大事な、義兄というより親しい友人。

なにもわからずにマルシアス本家に放り込まれ、絶望で自ら死すら願った自分を此岸に引き留めてくれたなにより大切なひと。

恩返しも含めて、ずっとそのそばで生きて行きたいと願ったただひとりのひとだった。

捨てるつもりだった命を拾い上げてくれたあのときから、自分の人生は全部彼のために使おうと、そう誓ったひとだった。

なのに――。

あの青年は、『自分』のために、アシュアイードを排除するようなことを口にしたのだ。そんなことは望んでいないというのに、そのことを必死に訴えかけたというのに、男は自分の言葉に耳を貸そうともしなかったのだ。

見ていると気持ちが悪くなるような歪んだ熱をたたえた瞳と声で、「必ずや、正当なる地位につけて差し上げます」などと言ったのだ！

冗談ではなかった。

そんなことは望んでなどいない。けれど、男の眼差しと声を思い出すと、不安でならなくなってしまう。

「……なんで」

こんなこと。

唇を噛みしめて、ウォルセンは嗚咽を噛みしめた。

あんな言葉など望んでいなかった。それどころか、いまのウォルセンにとっては最も忌避するものだというのに……。

「なぜ」

つぶやいた瞬間、彼は思い出す。

マルシアス本家に引き取られて以来、事あるごとに投げかけられた揶揄混じりの問いを。

『約束の地はどこだ!?』

『約束の地とはここではないのかい!?』

知らないのに、わからないのに、いくら訴えかけても止まることのなかった『大人』たちからの問いかけ。

いくらかぶりをふっても容赦してくれなかった大人たちは、常にあることを理由に「そんなはずはない」と言い切った。

『だって、君は「聖印の子供」なのだから』

かつて、故郷を追われたマルシアス一族が危機に瀕した際、奇跡の歌声でそれを救った女神が約束した子供なのだから——その証たる『翼ある蛇』の痣を、生まれつき抱いてきた子供なのだから……と。

(この痣が、元凶なんだ!)

本当は、ずっと昔にわかっていたことだった。

それでも、認めたくなかったのはアッシュが……アシュアイードがこの痣のことを『好きだ』と言ってくれたからで……けれど、もう。

『恥知らず』

今度脳裏に甦ったのは、アシュアイードを愛する少女の声。

『あんなによくしてもらっておきながら……』

（ああ、そうだね、ファンディア……おれは大した恥知らずだった。自分がアッシュにとってどれほど危険な存在なのか、気付こうともしないでぬくぬくと守られてきた。アッシュがそれを許してくれたから、なにも心配することないんだって思いこんで……）

少女がどれほど口惜しい思いで、自分を睨みつづけてきたのか——今日まで深く考えようとさえしなかった。

けれど、知ってしまった以上、立ち止まってはいられない。

（アッシュを否定する奴らの拠り所になるぐらいなら、こんな厄介なだけの痣なんて……こんなもの）

いらない。

いや、あってはならないものだ。

そう決断したウォルセンの行動は早かった。

目に映った暖炉の中で燃える薪——。

（こんな痣があるから、変なこと考えるひとが出てくるんだ。こんなもの……）

焼き潰してしまおう——。

思うと同時にウォルセンは暖炉に右手を伸ばしていた――。

# 9

じくじくと、腕が痛む。
皮膚と肉を焼いた熱が、いつまでも体内に居座っているかのように肉を焦がしつづける。
（こんなの、ただの錯覚だ）
だって、心底焼きたい、焼き尽くしたいと思った痣は、燃えさかる薪を押しつけたにも拘わらず、かけらも損なわれることなく残っているのだ。
多分自分は、痛みに負けて、最初の決意を貫くほどに強く燃える薪を押しつけることができなかったのだ。
……痣は、消えないままなのだから。
この痣がある限り、アタラクシア家はきっと諦めない。この痣を理由に、自分をマルシアス家の当主に立てようとする。
そんなことは、当主であるエルセイドも周囲も自分さえも望んでいないというのに。

（おれが、アッシュの代わりに……!?）

冗談ではない。

怖気を伴う想像だ。彼のために、彼のそばにいたいと……できれば役に立ちたいと思う自分の意思を無視した一方的な押しつけだ。

ありがた迷惑というものだ……払いのけるために、彼が『理由』にあげる『聖印』とやらを焼いて消してしまおうと思ったのに、浅はかな子供をあざ笑うかのように、焼けただれた皮膚のなか、件の痣だけがあざやかに無傷で残っていた。

（もう……どうしたら……）

自らの体を抱きしめ、ウォルセンは寝台の中で丸くなる。

炎を突き当てた、痣の周囲が痛みを増していく。

「いた……い……」

痣を葬ることができたなら、決してあげることのなかったはずのつぶやきが、洩れた。

（痛いよ……アッシュ）

ぎゅっと固く目を閉じ、けれど決して声には出さぬためにウォルセンは唇を噛みしめた。

……告げること、伝えることは許されないことのように思われた。

彼を脅かす元凶をこの腕に持つ自分が、どうして彼に救いを求められるだろう!?

そんなことができるはずがないのだ。
それでも、心を襲う痛みに耐える時、脳裏に浮かぶのは両親ではなく幼い頃に親しくつきあっていた人たちでもなく――。
濃褐色の髪に、極上の翡翠の双眸を持つ、ただひとり友と呼べるひとだけなのだ。
（アッシュ……）
彼に救われたこの魂にかけて、彼のために生きたいと思ったけれど。
その障害となるならば、我が身の一部を損なってもかまわないと思い、実際にそうしたのだけれど――元凶は消えず、この身は変わらぬまま。
（だとしたら、あとは……もう）
そう思ったときのことだった。
ウォルセンの寝室の扉を叩く、音が聞こえたのだ――。

（誰だよ、こんな時間に）
苛立ちを覚えたウォルセンは、最初そのノックを無視した。

（こっちは痛くてたまらない思いをしてるんだ。どうせ、こんな時間に押しかけて来るやつがまっとうな輩なはずはないんだから、無視するに限る！）

本音を言うなら、無視するどころかこてんぱんにやっつけてやりたかったのだが、現実的に無理だと判断した結果である。

しかし、ノックは執拗に続いた。

しかも、最後にはウォルセンには到底無視できない声による呼びかけがなされたのである。

「……ディー……」

その声を認識した瞬間、ウォルセンの肩がびくりと震えた。

（どうして……）

思ったものの、もう無視することはできなかった。

慌てて飛び起きると、彼は扉に駆けつけた。

そうして、目にした……間違いようのない訪問者に、ウォルセンはくしゃりと顔を歪めた。

（なんで……よりにもよって、こんな時に……）

彼が、訪れるのか――。

「……アッシュ……なんで……」

「良かった、起きててくれて……入れて？」

小さな籠を抱えた義兄にしてかけがえのない親友は、にこりと微笑んだ。
ただ、その極上の翡翠にも喩えられる双眸は、決して笑ってはいなかったのだけれど。

「腕、見せて」
有無を言わせぬ笑顔で押し入ってきたアシュアイードは、扉を閉めるなりそう言った。
その身を包むのは寒気を覚えるほどの怒気――呑まれたウォルセンは、それでも右手を差し出した。
「違う。左」
告げる声には、ウォルセンが知る優しさも穏やかさも含まれてはいなかった。
ぞくりとした――背筋を伝ったその感覚は、これまで一度も相手に対して覚えたことのない恐怖だったのかもしれない。
「……アッシュ……」
許しを請うようにその名を呼んでも、親友はきつい眼差しを緩めてはくれなかった。
「ディー、もう一度だけ言うよ。左腕を見せて。イヤだと言うなら、無理矢理にでも見せて貰

うよ」

紛れもない本気のにじむその声、言葉に、ウォルセンは抵抗を諦めた。

出会って以来、一度だってアシュアイードに隠し事ができた例はないのだ。だからこそ、この怪我を知られないよう、体調の不良を理由に顔を合わせないようにしていたというのに……どうして見抜かれてしまうのか。

「……たいしたこと、ないんだ……」

「たいしたことかどうかは、君が判断することじゃない。いいから、見せて」

絶対に譲らぬ覚悟を声に滲ませて告げられた言葉に、ウォルセンはそっと息をついた。

それでも、こんなアシュアイードを前にして抵抗は無駄だとわかっていたから、仕方なくシャツを脱いだ。

処置もせず、ただ傷を隠すためだけに巻かれた包帯には血と黄色い体液が混じったようなシミが広がっている。さらに、その下には——。

「ディー……」

泣きそうに顔を歪めて、アシュアイードがつぶやいた。

燃える薪を押しつけたウォルセンの左の二の腕には、酷い火傷が広がっていた——にも拘わらず、『聖印』だけが損なわれていないのだ。

「馬鹿なことを」

何かに耐えるかのように、食いしばった口から絞り出すように、アシュアイードは声を洩らした。

そして、抱えていた小さな籠から広口の小瓶を取り出して、彼は乱暴な手つきで軟膏をウォルセンの火傷箇所に塗りつけた。

「……っ！　アッシュ、痛い……」

思わず零した声に、返って来たのはこの上なく冷ややかなそれ。

「当たり前だろう。こんな……こんな火傷なんかして……」

こんな馬鹿、見たことない――つぶやくアシュアイードの声は、怒りに溢れていたものの、同時になぜか泣きそうなそれに聞こえた。

「馬鹿なところがあるのは知ってたけど……ディー、なんて……なんで、こんな馬鹿なことを……見ている方が、よっぽど痛いじゃないか。こんな真似して、もしかして僕を弱らせるつもりじゃないだろうね!?」

怒りも露わに施される手当ては、実際かなりな痛みを伴うものではあったけれど、ウォルセンは最初の一言以外、抗議の言葉を口にすることはできなかった。

自分を傷つけたこの行為が、それ以上に彼を傷つけたことに気づいてしまったからだ。

（ああ、でもアッシュ）

この消えない痣を持つ自分は、いったいどうしたら、君の障害とならずにすむのだろう!?

君の未来を翳らせる要因など、一つ残らず潰して回りたいぐらいなのに——皮肉なことに、最大の元凶がこの自分自身だなんて。

（どうしたら、いいんだろう……）

手当てを受けた左の二の腕にそっと指を這わせ、ウォルセンはきつく目を閉じた。

どうしたらいいのだろう!?

ウォルセンは必死に考えた。

自分の意思を無視するマルシアス家のことなど、本当のところはどうでもいい——一族に対する憎悪は、実のところ消えてはいないのだ。

だが、その運命の中心に、アシュアイードがいる以上、分裂の危機は是が非でも避けねばならなかった。

皮肉なことだ、と思わずにはいられない。自分の腕に聖印がなければ、家族から引き離され



ることはなかった。

だが、そうしてマルシアス家の本家に引き取られなかったら、アシュアイードと出会うこともなかったのだ。

アシュアイードが大切だ。彼の父に望まれたからではなく、心から彼のそばで彼を支えたいと思う。

だから、彼の病弱さを理由に、その資質を軽視するアタラクシア家のことは大嫌いだった……意外に思われるかもしれないが、ウォルセンはそうした意味では、自分を危険視し、アシュアイードの側から排除しようと目論んでいるラルクティア家の方を好ましく思っているぐらいなのだ——アシュアイードを大切に思っているというその一点で以て。

ただし、向こうの望み通り排除されてやるつもりはなかった。

この家にあって、ウォルセンが心安らかであれる場所は、アシュアイードのそばにしかなかったからだ。

だからこそ、悩みは尽きない。

当主エルセイドの意向に表だって逆らう者はいないが、決して一枚岩でないことはここしばらくの動きからも明白だ。これが表面化するようなことになり、一族が割れるようなことになったら——考えたくもない。

（やっぱり、この痣が一番の問題なんだよな……）

火傷の癒えきらない左腕にそっと触れながら、ウォルセンは半眼を閉じた。

炎にさらされても、緋色の痣は消えることはなかった。このことが知れたら、アタラクシア家は聖印への傾倒をより強めるだろう。断じて知られるわけにはいかない。

（だったら……）

ウォルセンは自覚はなかったが、かなり精神的に追い詰められていた。

だから、こんな突拍子もない考えが浮かんでも、即座に一蹴できなかったのだ。

（いっそのこと、この左腕がなくなれば……）

いくらなんでも、痣が移動することはないだろう――左腕ごと、聖印を捨て去ることができれば、アタラクシア家ももう自分に執着を示すことはなくなるのではないか。

無茶苦茶なことを、しかしこのときウォルセンは本気で検討しはじめた。

と、そのときのことだ。

「ディー……!?」

優しい声に呼びかけられ、ウォルセンは意識を現実に引き戻された。

いつの間に入ってきたのか、アシュアイードが真正面から顔を覗きこんでいた。

「アッシュ！　いつ……」

「ノックはしたんだけどね、返事がないから……もしかして、また熱がぶり返したんじゃないかと思って……」

そう答える少年の翡翠の双眸が向けられるのは、ウォルセンの左の二の腕――。

例の『馬鹿な火傷』を負った夜、高熱に浮かされるウォルセンのそばで、「馬鹿、この考えなし」などと繰り返しながら、一晩中付き添ってくれたのはアシュアイードだった。

生来あまり体が強くない彼は、だからこそ高熱の苦しみを知り抜いており、心配して来てくれたのだろう。

その優しさに、心の奥が熱を帯びる。

(ああ、やっぱり、アッシュのことが大好きだ……)

だから、ずっとそばにいたい――たとえ、どんなことをしてでも。

しみじみとそう思いながら、ウォルセンはにこりと笑った。

「ありがとう、でも大丈夫。アッシュにもらった塗り薬のおかげで、眠れないなんてこともないし……痛むのは自業自得だし」

これは、アシュアイードにさんざん言われたことだ――冗談めかしてそう告げることで、先ほど思いついた『選択』を、決して気取られぬようにした。

自分が今の今までなにを考えていたのか、知られるわけにはいかないのだ。それを決して、

アシュアイードは許してはくれないだろうから……。

そんなウォルセンに、「そう……？」とアシュアイードは懐疑的な視線を向けてきた。

こういう時の親友は、勘が鋭くて困る――そうでなければ、このマルシアス家を背負っていくことなどできないのだろうけれど……もう少し鈍くてもいいのに、とウォルセンは思う。

しかし、幸いなことに、アシュアイードはその件に関して、それ以上追及して来なかった。

ありがたいと、内心ほっとしたウォルセンだったが、しかしつづけられた言葉に、不穏な気配を感じ取った。

「それなら、いいんだ。……うん、僕も言っておきたいことがあったから……ディーが熱を出しているようなら、機会を改めようと思っていたけど……うん、それなら」

「……アッシュ……？」

なぜか、心臓が締め付けられるような感じがした……不安ゆえに。

そんな彼の心中を知って知らずか、アシュアイードはふんわりと微笑んだ――いつだって、ウォルセンを安心させるその笑顔。

けれどなぜか、このときばかりは違った。

笑っているのに……アシュアイードは確かに笑っているのに、その緑の瞳の奥に、これまで見たことのない激しい炎にも似た輝きが宿っていて、それがウォルセンの心臓を鷲掴みにした

のだ。

「ディーはけっこううっかりさんで、しかも時々考えなしな行動に走るから、もう少し思慮深く行動することを覚えた方がいいと思うんだ」

かなり……辛辣というか失礼な言葉だったが、火傷の件があるウォルセンに反論の余地はなく、「うう」と唸るしかなかった。

そんな彼に、アシュアイードはなおもつづけた。

「だからね、ぼくも考えたんだよ。本人がいくら気をつけてても、根っこの部分がうっかりさんで時々考えなしなのでは、いつ何時また同じようなことを繰り返すかわからないし……あんな思いは、もう二度と味わいたくないからね」

執拗に『うっかり』と『考えなし』を繰り返すあたり、アシュアイードはまだ完全に怒りを解いたわけではないのだろう。

(ますます、さっき考えたことは知られるわけには……)

いかないな、とウォルセンが考えた時のことだった。

「だからね、ちょっと釘を刺しておこうかなと思って――ディー」

そう言うと、アシュアイードは両手でウォルセンの頬を包みこんだ。

反らすことができないように固定した上で、じっと目を見つめてくる。

「覚えておいてね、ディー。これから……この先、お前が怪我したら――」

どくり、と心臓が大きく脈打った。

お前――上から見下すようなその呼びかけが、しかしアシュアイードのなかでは特別なものであることを知っているからだ。

彼はその呼びかけを自分に対してしか使わない――どこでどんな勘違いをしたのかは知らないが、彼にとって『お前』という呼びかけは、心底大切で親しい相手に向けるものだと認識されているのだ。

そうして、それを向けるのはウォルセンただひとり。

それも、本気の本音を告げる時だけに限られている。

しかもそう言う時、彼が口にするのは、大抵が過激なことで……。

「寸分変わらぬ傷を、僕はこの身に負うからね。指を針で突いたら、同じ刺し傷を。転んで擦り傷を負ったら、同じ箇所に擦り傷をつくる。斬られたりしたら、やっぱり同じ場所に同じ深さで――」

はたして、とんでもない台詞を並べ立てられ、ウォルセンはぎょっとした。

「馬鹿なこと言うな！」

怒鳴りつけたが、アシュアイードは涼しい顔で「馬鹿なことじゃないさ」と言い返してき

た。

「断っておくけど、本気だよ。冗談だと思うのはディーの勝手だけど……ああ、そうだね。一度ぐらい、実践して見せないと信じてはもらえないかな？　だったら、やっぱりディーの一番新しい怪我は火傷だから――」

真っ直ぐに自分を見つめていた翡翠の瞳が、すっと暖炉に向けられた。

そこには――。

「アッシュ！」

紛れもない彼の本気を感じ取り、ウォルセンは悲鳴を上げた。

「止めろ！　やめて、お願いだから、アッシュ！」

これがただの脅しだと思えたら、どんなによかっただろう。

また、たとえ本気であっても、いざとなれば気後れするに違いないと思うことができたなら……けれど、ウォルセンはアシュアイードのことを知りすぎていた。

一度やると口にしたら、彼は絶対にやり遂げるのだ。

そんな時、周囲の嘆きも願いも、彼に届くことはない。

……彼は、確かに揺るぎなく支配者であるのだ。

「……しない、から……」

もう、怪我なんて――。

決してとは言えなかった……言えるはずがない。

けれど。

「……絶対、大怪我だけはしないから……だから、俺の怪我を自分の体に再現するだなんて、そんな恐ろしいことはしないで……お願いだから」

縋り付いて、必死に頼んだ。

アシュアイードが自分を諫めるために自傷行為に走ることなど、到底認められなかった。けれど、親友の心を動かすために、自分にできるのは懇願することだけだったのだ。

そして、願いと誓いを自ら口にしたことによって、ウォルセンは先ほどまで考えていた選択肢を、完全に放棄せざるを得なくなった。

左腕切断による聖印の破棄――。

あるいは、アシュアイードは自分がその考えに至ることを読み取った上で、こんなことを言い出したのではないのか――とは、後日気づいたことだ。

だが、そうであろうがなかろうが、一番有効に思える選択肢が完全に消し去られたのは確かな事実だった。

「……誓う、から」

絞り出すように声を紡ぐと、小さなため息が、聞こえた。
「大怪我だけ、なんだ？」
泣き出しそうになった。
「……だって、そんなの誓えるはずがない……」
この先、決してかすり傷ひとつ負わないなど——そんな、ありえないことを、約束だなんでできるはずがない。
一族は割れかけている。さまざまな思惑が絡み合い、この先どんな事態が生じるかなど、ウォルセンには読み取れないのだ。
その果てに、傷を負うことは避けられないだろう——極力避ける努力をしたところで、完全に無傷ではいられるはずがない。
「……ごめん。嘘は誓えない……」
絞り出すようにして告げた言葉に、返ってきたのは苦笑混じりのため息だった。
「仕方ないから、それで勘弁してあげる」
「うん」
うなずきながら、ウォルセンはぼんやりとだが認識した。
自分はこの先、決して命に関わるような怪我や病を得ることは許されなくなったのだと。

強引で傲慢な、それでいて優しい鎖が、自分という存在そのものを縛り上げていくのを感じた。

けれどその束縛が、信じられないぐらいに嬉しくて、ウォルセンは小さな笑みをこぼしたのである――。

# 10

張り詰めた糸が切れるまで、それでも一年ほどの時間はあった。
けれど、その猶予にどんな意味があったというのか……生かし切れなかった己の未熟さに、ウォルセンはただ唇を噛みしめるほかない。
どちらが先に仕掛けたのか——それは定かではない。
自分がラルクティア家の放った刺客に襲われたのが先か、アシュアイードにアタラクシア家からの毒が届けられたのが先か——ふたりとも、その事実を互いに隠し合ったから、本当にわからない。
ただ、両家がそのことに気づいた瞬間、糸は切れた。
刺客の送りあいと潰しあいが傍目にも明らかになったとき、ウォルセンは最早自分がアシュアイードのそばにいられないことを悟った。
傷つくわけにはいかなかった——アシュアイードに誓ったから。

だが、そのために彼が傷つくなど、あってはならないことだった。
どう考えても、自分の存在が邪魔だった。
誓いに背かず、親友を守るために、自分にできることは何なのか――。
ひたすらに考えて、ウォルセンが選んだ道は、身を隠すこと、だった。
ラルクティア、アタラクシア――どちらの手に落ちてもならない。逃げ出せばマルシアス侯爵も追っ手を差し向けるに違いない。
それでも、ほかに方法は見つからなかった。
だから。
ウォルセンは家を出たのだ。

朝の光がさしこむ一室で、ウォルセンはため息を洩らした。
見慣れた寝具、見慣れた調度――二年前、二度目の家出を決行したときのまま、何一つ変わっていない……黒鷲城に与えられた自分の寝室だ。
二度目の家出に失敗したとき、エルセイドはウォルセンをこの城ではなく、ロスタロイドの

屋敷に送りこんだ——数人の結界術師によってすでに封じ終えられたあの牢獄に。

そうして折を見て、アシュアイードもロスタロイドに移ってきた。

マルシアス家の本拠地であるアシャスよりディエーン王都のほうが、アタラクシアやラルクティアの動きを制限でき、ふたりの身の安全を図りやすいというのは、なんとも皮肉な話だった。

その屋敷を、ロスタロイドを襲った『黄金竜』騒ぎにまぎれて抜け出して——ようやく果たせるかと思った望みは、結局一年で潰えてしまった。

脳裏に甦るのは、まだ新しい絶望の記憶——。

金髪の少女を騙すようにして振り切った後、一刻も早くエアランの街を出ようと足を進めていた時に、不意に消えた精霊たちの気配。

異常に気づいて周囲を見渡したときにはすでに手遅れだった。

張り巡らされた強固な結界には一分の隙もなく、捕獲者たる黒髪の結界術師の笑みは余裕に満ちていた。

そうして、男は告げたのだ。

『帰りましょう？　御当主は心配なさってますよ？』

その声を耳にした刹那——。

（捕らわれる）

と、確信し、心は絶望で真っ黒に染まった。

しかし、次の瞬間、信じられない奇跡が起こった。

完全に、完璧に閉ざされていた空間に亀裂が走る。

そうして、飛び込んできた金色の光――。

それが、出会ったばかりの少女の姿をしていたように見えたのは――藁にも縋る思いがもたらした幻覚だったのだろうか……。

覚えているのは、黒髪の男の舌打ち。

そして――。

やさしく愛しい光とも温もりともつかぬものが、胸に飛び込んできた……そう、多分あれこそが錯覚。

なぜなら自分は、あの結界術師に連れ戻され、二年前と同じ部屋で今こうして目覚めたのだから。

寝台に半身を起こし、ウォルセンは両手で頭を抱え込んだ。

（連れ戻されてしまった……）

その事実が、重く肩にのしかかる。

どこまでも優しいくせに、一度こうと決めたら頑として退かない親友との約束を守るために手にした自由はもう終わり。

後は、この蔦が絡まり合ったかのような世界で、我が身と彼を守る抜いていくしかないのだ……。

「……アッシュ……」

小さく、小さくつぶやいた。

（君のことだけは、守りたいのに……）

そう思い、固く目を閉じたとき、寝室の扉が廊下側からノックされた。

「……起きている」

不機嫌に答えると、耳に馴染みのない女性の声で告げられた。

「お目覚めであれば、御当主が朝食をともに、と――」

当主と聞いて、思い浮かぶのはエルセイドの顔だ。

七歳で養子として引き取られて以来、ずっと自分のことを駒として支配してきた男は、どうやらこれからも扱いを変えるつもりはないのだろう。

ひとつ息をついて、ウォルセンは応じた。

「……わかった」

そうして、のろのろと起き上がった。
「お支度を――？」
お手伝いいたしましょうか――とでも続けるつもりだったらしい女性の声を、「自分で出来る」と一蹴し、そうしてウォルセンはそこで初めて、自分が以前使っていた夜着を身に纏っていたことに気付いた。
何から何まで徹底している。
最早、言葉も出なかった――。

用意されてあった真新しい服に身を包み、黒鷲城の主が待つという部屋を目指して、長い廊下を進む間、ウォルセンの頭を占めていたのは、マルシアス侯爵エルセイドの思惑がどこにあるのか――その一事に尽きた。
この城にあったころには気付かなかった――否、気付けなかったことだ。
アタラクシア家とラルクティア家の対立の旗印として、自分とアシュアイードがそれぞれに御輿に担ぎ上げられ、互いの感情に関係なく命の危険にさらされ続けていたあの頃は、少なく

とも自分はぎりぎりいっぱいの状態で、それ以上のことに気を回す余裕などなかった。

ふと、疑問を抱いたのは、家出に成功してから季節が三つほども巡ったころのことだったろうか――。

不意に――本当に、なにがきっかけということもなく突然に、その問いはウォルセンの胸に降ってきたのだ。

侯爵は、何を望んでいるのか――という、これまで思いもしなかった疑問が。

アタラクシア家のウィーカルドによって、聖印を持つことが暴露されたせいで、ウォルセンは本家にとって無視しがたい存在として養子に迎えられることになった。

何代も前に勘当同然に繋がりを断った傍流に生まれた子供を、アタラクシア家の進言――ありがた迷惑以外の何物でもなかったが――を受け入れる形で、正式に、嫡子であるアシュアイードに次ぐ継承権まで保証した形式を整えて、彼はウォルセンをマルシアス家に引き取ったのだ。

『君には息子の補佐をしてもらう』

確かにエルセイドはそう言った。

そして、それがかなうだけの教育も与えられた――それが、アタラクシア家に余計な欲を覚えさせかねないと、わからぬはずもなかっただろうに。

わざわざ危険を冒して自分をアシュアイードの補佐に仕立てようとしたのはなぜなのか。

（火種になった時点で切り捨てるつもりだった……？）

だとしたら、十三歳になったころ、自分に直接アタラクシア家が接触してきた時点で、何らかの手を打ったはずだ……そう、とても簡単な方法で。

しかし、エルセイドはそうはしなかった。

アタラクシアとラルクティアが互いの御輿を狙い合うようになってさえも、エルセイドがウォルセンを切り捨てることはなかった。

それはいったい何故なのか。

（まさか……）

と思う。

しかし、考えられることは限られている。

初めてエルセイドの前に連れていかれたときから、何度も何度も、ふと思いついただけといった様子で繰り返されたあの問いの、意味――。

『約束の地とはどこにあるんだい？』

あの問いが、気まぐれでも何でもなく、本気で答えを求めるものであったならば――？

一族を養うに充分な財と、一族を守るに充分な権力を得た上で、さらにそれ以上のものをあ

の義父は求めたというのだろうか……？

ウォルセンにもある他者からの支配を厭う気質は、マルシアス家――いや、マーシャス一族全体に深く根付いたものだ。

（仕える国を乗り換えたところで、今ほどの繁栄は望めないだろうに……戦乱のつづく時代ならともかく、安定したいまの時代、主を選び直すということは、ディエーンに対する裏切りに他ならない。そんなことを、ディエーンは決して認めないだろう……だとしたら）

ほかに考えられることは、おそらくはひとつだけだ。

（独立でもするつもりなのか？　いや、一部の過激な聖印信奉者たちと義父上は違う。あの方はそんな未熟なことは考えられない……だが、おれの存在ゆえに、それに近いことを考えているのだとしたら……）

だが、いったいどのようなことを――？

こればかりは、いくら考えてもわからない。

どうしても知りたいのであれば、エルセイドに直接尋ねるより他にないだろう――易々と答えてもらえそうにはないが。

そんなことをあれこれと考えている間に、ずいぶん進んだのだろう。

気がつけば、目前に重々しい扉があった。

先導してきた男が扉の向こうに声をかける――それに返ってきた声に、ウォルセンは思わず息を呑んだ。

（そんな……!?）

馬鹿な、と唇が声なく紡ぐ。

しかし、それが幻聴などではないことは、開かれた扉の向こうに佇むひとつきりの人影からも明らかだった。

「ディー」

かけられる声はどこまでも優しい。

濃褐色の髪も、透けるような白皙も、極上の翡翠もかくやという双眸も――何もかもが懐かしむまでもなく脳裏に刻み込まれていた親友にして義兄がそこにいた。

自分を連れ戻すよう結界術師を派遣したのはマルシアス家当主――つまりは義父エルセイドのはずではなかったのか。

なぜ、ここに彼がいるのか。一族当主のための部屋で、どうして彼が自分を迎えるというのか。

「アッシュ……」

呆然と名をつぶやくウォルセンに、アシュアイードは満面の笑顔で歩み寄り、その体を抱き

しめた。

「久しぶりだね……会いたかったよ、ディー」

## 11

最後に顔を見たのは一年以上前。
季節の変わり目で体調を崩し、熱を出して苦しそうだった。
あれから五つ目の季節を迎える今、再会した親友は記憶にあるより――悔しいことに――頭半分ほども背が高くなっていた。

がたごとと揺れる馬車のなか、ウォルセンは不機嫌な面持ちで流れる風景を眺めるともなく眺めていた。
向かう先はイーヴ――アシャスの北東に位置する小さな村だ。
義母であるアライセイダが、現在居住している山荘が目的地である。

一年ぶりに義兄兼親友と再会を果たした三日後に、そばを離れることになったのは別に構わない彼だったが、不機嫌にならざるを得ない理由が目の前にどっかりと腰をおろしているとなれば、笑顔になどなれるわけがない。

アシュアイードは、現在自分が当主代行を務めているのだと告げた後、マルシアス侯爵エルセイドが半年前に命を落としたことを打ち明けたのだ。

その事実が世間に未だ明かされていないのは、死因が判明しない不審死だったせいだと。

真っ先に考えられるのは暗殺の可能性だ。それを調査するためにも、一族でも一部の者にしか事実は知らせず、アシュアイードが代行しているのだと。

ただし、そのことが明らかになっては今度はアシュアイードが標的になりかねないということで、表向きは病床にあるエルセイドが執務を行っていることになっている、とも。

当然の判断だとウォルセンは思う。

そして、アシュアイードが代行を務めることに反対の声が上がらなかったということは、そのまま彼が跡を継ぐことを、一族が認めたことを意味しており、ウォルセンとしても喜ばしく思ったのだ。

だから、そこまでは良かったのだ……良くなかったのはその後である。

『まあ、そういうことだからね、いつ矛先が向くかも知れないディーを、あのまま放っておく

ことはできなかったんだ……強引な手を用いたことを、許してくれるかい!?』

完璧な事後承諾である。

しかし、昔からウォルセンはアシュアイードには勝てなかったし、彼のそういう性格には――少々悲しいが――慣れてしまっていたということもあり、ため息混じりに頷くしかなかったのだ。

本音を言うなら、せっかくマルシアス家の後継問題が、エルセイドの不審死が原因とはいえ、うまくまとまりそうなこの時期に、なにも呼び戻すことはなかったろうに、とは思ったのだけれど。

だが、そんなことを口にするほどウォルセンは命知らずではなかった。

アシュアイードは一見穏やかだが、一度怒りに火がついたら手のつけられない状態になることを、長いつきあいでイヤというほど目にしてきたからだ。

ただでさえ、実の父の不審死で緊張状態を強いられているだろう彼に、「おれのことは放っておいて」などと言えば、怒りの導火線が点火状態になるのは目に見えている。その挙げ句、どんな事態が生じるか……考えるのも恐ろしい。

かつて、ウォルセンの『聖印』を偽物扱いした上に、酷い侮辱の言葉を吐いたある分家の当主を、じわじわと破滅に追い詰めた手口を間近に見たことがある身としては、下手なことなど

言えるはずがない。

まあ、その件に関しては、『仮想政敵潰しの策あれこれ』だと説明され、一緒になってああだこうだと策を詰めることになったウォルセンには本当に何も言う権利はないのだが。

それはまあ、置いておくとして、だ。

だから、アシュアイードが次に口にした言葉にも、うなずく気になったのだ。

『情けないことだけれど、何者が父上を狙ったのかはまだ完全には絞りきれていない状況なんだ。母上には完全な警護態勢を敷いた上で、イーヴの山荘に移っていただいている。ディーには悪いけど、君もしばらくそこで身を潜めてはくれないかい？』

頼む形を取った、命令だとすぐにわかった。

けれど、これに関しても、逆らう気は起こらなかった。

ただ、気になる点を問い質すことだけは譲れなかった。

『おれを、そうやって隠して……アッシュは？』

狙われている可能性があるのはアシュアイードも同じはずだった。

いや、養子にすぎない自分やエルセイドの妻とは言っても統治にほとんど関わって来なかったアライセイダよりも、狙われる確率はアシュアイードの方が格段に高いのは考えるまでもなかったからだ。

しかし、昔から慇懃無礼な振る舞いの上でのことを除けば、とかく謙遜というものからほど遠い性格の主は、自信たっぷりな顔で『大丈夫だよ』と応じたのだ。

なにのどこらへんが大丈夫なのかと尋ねたところ、返ってきた答えは。

『わたしは、今もロスタロイドのマルシアス家の屋敷で寝込んだり起きたりを繰り返しているから』

というものだった。

寝込んだり起きたりを繰り返している――ことになっているから、ではないところが注目点だ。

恐らくアシュアイードは他者には見抜きようもない完璧な『影』を用いて、完全なその『現実』を作り上げているのだ。

目の前に存在するアシュアイードこそが、それこそ幻か偽物だと断じられるほどに。

だからこそ、彼は自分の前にいるのだ。

……恐ろしい存在だった。

自分には到底真似が出来ない。

大好きで大好きで、けれど決して追いつけない……そうとわかっていても、隣に立ちたいとかつて願わずにおれなかったひと。

しかし、そう願う以上に、彼の障害となる存在は決して許せないと……それが自分であっても排除するのに迷いはないと、躊躇いなく思えたひと。

そんなひとの言葉を、どうして正面から受け止めずにいられるだろう。

『正直なところを言えば、本当はディーにはわたしのそばにいて欲しい。ディーはわたしとは違う視点から物事を見つめることができるから。ディーに助けて貰えたら、父の死にまつわる謎は、わたしひとりで仕切るより早く解決できると思う……けど』

けれど——と続けられた内容ゆえに、ウォルセンは引き下がざるを得なかった。

『ディーが側に来たら、きっとどれほど気をつけても、どこかでわたしはマルシアス侯爵エルセイドらしくない判断を下してしまうと思う……』

……それは、ロスタロイドにいるとされるアシュアイードの存在が疑われかねないということだった。

そんな致命的な不審を買うような真似ができるはずがない。

だから、ウォルセンは不承不承ながら、親友の言葉にうなずいたのだ——ただ、覚えた素朴な疑問がぽろりと口からこぼれ落ちたことだけが予定外だったのだが。

『それなら、なにもおれのこと、わざわざ黒鷲城に連れて来ることなかったのに……』

内密に、イーヴの山荘まで運んだら、余計な手間は省けただろうに——と思ったウォルセン

に恐らく罪はない。

実際に政治的活動こそしていなかったとはいえ、エルセイドの妻であるアライセイダは、アシュアイードとウォルセンから聞く話を通じて、かなりどころか侯爵家内のほとんどの事情に通じている。エルセイドに口出ししなかったのは、あくまでその必要性を覚えなかっただけのことで、相当な能力の持ち主であることはアシュアイードもウォルセンも早くから認めていた——隠れた女傑なのである。

そんな彼女が住んでいるイーヴの山荘に自分を送りこめば、事態の説明は彼女がしてくれたのに違いなく、一族ばかりかディエーンの目まで光っているに違いない、このアシャスにいったんウォルセンを連れてくる必要はなかったはずではないのか——。

そんな思いで、つい洩らしてしまった一言だったのだが、これに対してのアシュアイードの反応は、はっきり言ってウォルセンの想像を超えるものだった。

あろうことかなかろうことか——アシュアイードはウォルセンのその言葉を聞くなり、これまで見たこともないような、悲しげとも切なげとも情けなさげとも……何とも形容に困る顔になり、これ以上はあるまいというほど深い息を零したのである。

『ア、アッシュ……!?』

慌てて声をかけた彼に、翡翠の双眸を持つ青年は、悲しげな光をたたえた瞳で短く訴えてき

た。

『……最後に会ってから、一年以上経っているんだよ……!?』

一目でも――わずかな時間でも、一緒に過ごしたいと思うのはおかしいことかい!?

声には出されなかった想いはあまりにもはっきりしていて、ウォルセンは逆に自分の方が薄情者だと非難されたような気さえしたものだ。

だもので、アシュアイードの言葉にこくこくとうなずいたのだ。

『必ず三ヶ月……いや、一月半でけりをつけるから』

『その間だけ、母上とともに身を潜め、待っていて欲しい』

と、そう告げられた真摯な言葉に。

だが――だが、しかしである！

(アッシュ！　おれは、こんな厄介なおまけがついてくるだなんて話、一言も聞いてなかったぞっ!?)

内心怒りの赤鬼状態で、しかしそれをぶつける相手が最早遠い空の下というなんともやるせない状況にあって、ウォルセンはそれでも堪らず、馬車に同乗している黒髪の結界術師を睨みつけずにはおれなかった。

アシュアイードの言い分に納得はした。

だから、彼の言うとおり、事態が落ち着くまでの間、イーヴの山荘でアライセイダと過ごすつもりでもいた。

彼女には本当によくしてもらって、イヤな記憶などひとつもないのだ。

なのに、一族内で生じた争いのせいで、満足な挨拶ひとつ交わせないまま、家出と言えば可愛いが、実質出奔してしまったウォルセンは、彼女に対してかなり大きな負い目があった。

会って、せめて一言謝りたい——とは確かに思っていたことなのだ。

だが、それでも——それでもだ。

（おれをとっ捕まえた結界術師をそばに付かせるだなんて……アッシュの馬鹿！　おれの計画、大難航決定じゃないか！）

……実のところ、アシュアイードの頼みにはうなずいたものの、最後の最後では身を隠すつもりでいた——だって、すでに一族に次期当主として認められた親友のそばに、火種にしかならない自分がいるわけにはいかないではないか——ウォルセンにとって、親友がつけてくれた護衛の存在は厄介以外の何者でもなかった。

最大の味方となる精霊と自分の接触を断ち切れる能力を持つ男がそばにいたのでは、最後の最後に用意していた大技である、『風霊に頼んで失踪』策も使えない可能性が大きい。

それを思うと、ウォルセンの苛立ちはいや増すばかりなのだ。

（ああ、本当に……本当に！）

こいつを目の前から消してくれる誰かがいたら、無条件に感謝するのに――。

そう思うウォルセンは知らない。

彼が思わず無意識の内でも睨みつけずにおれない黒髪の結界術師の内心が、自分のそれとほとんどぴたりと一致していると言うことを。

（あー、もう、この不機嫌丸出し坊主と来たら！）

がたごとと馬車で揺られながら、同乗者である緑がかった栗色の髪と、それ以上に緑味の強い榛の瞳を持つ青年から向けられる、『邪魔、邪魔、お前邪魔！』と訴えかけてくる視線にうんざりしながら、黒髪の結界術師――リーイン・ル・ファンは、気付かれないようそっとため息をついた。

目の前の青年が、自分の同行を不本意に思う理由はわかってはいるが――誰だとて、固い決意あっての行動を阻止した相手をおもしろく思うはずがない――だからと言って、始終非難の眼差しを向けられて楽しいはずはない。

もっとはっきり言うなら、こちらだって被害者なのだという意識がある。

……思い出すのもいやな記憶ではあるが。

この世界の上流世界の住人らしい『約束反故』の禁を犯さなかっただけ、依頼主たるアシュアイードは上等の客だと言えた。

何しろエルアク山脈を境に、『西』と呼ばれる地域に住まう者たちは、とかく言霊を無視することが多い。

結界術師という『言霊』の影響を無視できないリーインにとって、この『西』のあり方は最初の頃は信じられないものだった。

言葉に宿る力を、こちらの住人たちは信じていないのだ。

だから、平気な顔をしてそら言を口にする。

こちらに流れ着いてしばらくというもの、リーインはそのそら言に右往左往させられた。

言霊の返しに怯えぬ者がいるなどとは想像もつかなかったリーインは、だから心底驚いたのだ——平気でそら言を口にし、しかも大した『返し』をうけることがない、この『西』の世界のありように。

だが、慣れ親しむ内に、住みやすさを感じるようになった。

言霊の支配の緩いこの世界は、追われる身である彼にとっては、考え方を変えれば易しい世

界でもあったのだ。

ただ、客たちの『そら言』には閉口させられたものだが。

しかし、今回の客に関しては、それはなかった。

不意打ちも同然に、術者たる自分の髪を切り取られた時には、正直殺意さえ抱いたものだが、依頼内容を果たすと同時に、切り落とされた一房の髪は、一筋の欠けもなく彼の手に戻されたのだから。

信用に値する相手だと認識したのを感じ取ってか、即座に無理のない内容における再取り引きを申し込んできたのも……評価に値すると思った。

他愛ない内容だったから、どこかで油断していたのかもしれない。

そんなものが許されぬ身であることを、自分は誰より知っているはずで……知っていなければならない身であったというのに！

それを思い出したのは、その気配——殺気としか呼びようのない、針のような気配に気付いた瞬間のことだった。

「伏せろっ！」

正面に座っていた、仏頂面の青年の体を問答無用で座席に押しつけながら、リーインはぎり、と唇を噛みしめた。

ぴぃぃん、と震える音をたてながら、青年が座っていた位置に突きたった――細い弓矢。
それを目にした瞬間、リーインは悟った。
（塡められた！）
絶望の頤が大きく開かれるのを、リーインは何も出来ぬまま、ただ感じることしかできなかった――。

詰め込むものは、限られている。

着替えと手みやげと、悩みに悩んで選んだ一冊の書物――。

それらを鞄に押し込んで、その口を閉じたのをまるで待っていたかのように、扉の向こうから声がかけられた。

「ヴィル・ダカール？　準備はよろしいですか？」

耳に馴染んだその声に、蜂蜜色の瞳を持つ少女は、元気よく「はい！」と答え、鞄を手に部屋を出た。

扉の外には、大好きで大好きで大好きなひとたちが、少しだけ心配そうな気配を覗かせながら立っている。

犬猿の仲である黒髪紫瞳の青年までもが、なにやら気遣うような目で見ているのに気付いてしまえば、心臓がとくりと脈打つのを感じたが、今更取りやめることなど出来ないし、第一その気もないのだから、つい青年に対して、（紛らわしいこと、しないでちょうだいよね）だなんて、八つ当たりにも似た文句をつけたくなった。

けれど、退くつもりは皆目ないから、足は前に進ませるしかない。
ぐるりを囲む大好きなひとたちを見つめて――。
今回同行してくれることになった赤味を帯びた栗色の癖毛の少女と、緑がかった金髪の青年の腕を取る。
そうして、見送るひとたちに、笑顔で一言――。
「行ってきます！」
と、ナルレイシアは叫んだ。

目指すは、マルシアス侯爵家の本拠地。
アシャス。

# あとがき

紫外線が気になる季節になりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

日焼け対策を怠って、夏前だというのに腕の肌色がグラデーション状態になりつつある前田珠子です（笑）。

今回は少し、お待たせしてしまいました。『天を支える者』緑の章第三巻『緑轟の檻に囚われ』をお届けします。

さて、『緑風』『緑の糸』とナルレイシアとウォルセンが出会って以来、ノンストップハイテンションに突っ走ってきた緑の章ですが、いったん別行動になった今回は、ウォルセンの事情に触れる展開となりました。

だもので、過去編が大部分を占めることとなりました。

ナルレイシアたち、出番が非常に少ないです。ファティ・リンシャも黒髪公爵も、台詞ひとつないというありさま……次巻はせめて台詞ぐらいは言わせたいかな（つまり、次巻もあまり

登場予定はないという……ふたりのファンの方には先に謝っておきますね）。

実のところ、ウォルセンの過去につきましては、『古戀唄（いにしえこいうた）』のように独立した番外編として書こうかとも思っていたのですが、ウォルセンの事情を明かさないことには、本編の進めようがないということで、今回の運びとなりました。

これまでウォルセンの回想やちらちらと思わせぶりにしか姿を見せなかったアシュアイード、堂々の登場です！　しかもカバーではウォルセン以上に大きく描いていただいております！　美しいです（このあとがきより後にカバーイラストを目になさる方はいらっしゃらないでしょうが、わかっていても力一杯主張したい！）！

しかし、過去編といい今回の再会シーンといい、あくまでウォルセンの視点から見たものですから、実際の彼の性格は少々違います。

彼がウォルセンのことをどう思っているのか、ウォルセンの知らないところでなにを考えているのか――などなど、次巻で明らかにしたいと思っております。

前巻のあとがきでも少し触れましたが、はっきり言って白くはないです（笑）。ウォルセンの目には鱗（うろこ）がはりついている模様です。

ここで、ひとつお詫（わ）びがあります。本文をすでにお読みの方は薄々お気づきかとも思いますが、緑の章は次巻では終わりません。申し訳ありません。一冊増えます。マルシアス家のお家

事情が当初の予定より膨らんだせいです……おかげで新しいタイトルのために辞書をひっくり返す羽目になりました。

というわけで、次巻タイトルは『緑玉の枷に繋がれ』です。檻に囚われたり枷に繋がれたり、ウォルセンは大変です。

さて、いつもなら困る近況なのですが、ここ数日、人生初と言えることがふたつも起こりましたので、そのことなど。

我が家は自然溢れる環境下にあります。狸も狐も猪も珍しくもなく、春には池にサンショウウオの卵が流れてくるという、野生の王国でありますが、さすがに庭先に野生のキジが飛んでくるのを目にすることがあろうとは思いもしませんでした。

特徴的な「ケーン、ケーン」という声は何度か聞いたことがありましたが、姿を見たのは初めてでした。綺麗な雄のキジが、我が家の庭を暢気に散策するさまは、なにやら愛嬌たっぷりで見ていて楽しかったです。

もうひとつは、まさに珍事です。

この春以降、我が家のキンカンの木に、落ちたキンカンの実目当てか、若い（というか、子供の）アナグマが出没し始めました。

本当にまだまだ小さく、世間を知らないから人間をさほど怖がらない。懐中電灯で照らして

も、きょとんと小首をかしげるだけのその姿は可愛いの一語に尽きます。

が、珍事とはこのことではありません。

深夜、突然なにかが争う声が聞こえたわけです。猫の喧嘩とも犬のそれでも当然人間のでもありません（最後のだったら、電話機を取ったでしょうね）。何事かと懐中電灯を手に駆けつけましたところ、お馴染みさんとなった子供のアナグマが、一回り以上大きな別のアナグマに追いつかれてがっちり抱え込まれた上で噛みつかれていたのです！　子供アナグマの悲痛な声に、思わず――抱え込んでる大きなアナグマの背中を蹴りつけてしまったわたしです。

よもや、アナグマ同士の縄張り争いに、蹴りで横槍を入れる日が来ようとは想像もしてませんでした。結局、それで拘束が甘くなったのか、子供アナグマは無事逃げ出しました。でもよほどに怖かったのか、以来姿を現しません……寂しいです。

さて、今回も挿絵の明咲トウルさまをはじめ、関係者のかたがたには大変おせわになりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

次も天支です。

それではまた、お会いできますように――。

平成二十年　初夏

前田　珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

この作品のご感想をお寄せください。

**前田珠子**先生へのお手紙のあて先

〒101―8050
東京都千代田区一ツ橋2―5―10
集英社コバルト編集部　気付
**前田珠子**先生

**まえだ・たまこ**

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



天を支える者
緑蘿の檻に囚われ

COBALT-SERIES

2008年7月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　礒田憲治
発行所　株式会社集英社

〒101−8050
東京都千代田区一ツ橋2−5−10
(3230)6268(編集部)
電話　東京(3230)6393(販売部)
(3230)6080(読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2008　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN978-4-08-601182-2 C0193

〈好評発売中〉
コバルト文庫

本好き少女の波乱万丈ファンタジー！
前田珠子〈天を支える者〉シリーズ
イラスト／明咲トウル

天を支える者
天を支える者2
天を支える者3
天を支える者4
天を支える者 古戀唄
天を支える者 古戀唄2
天を支える者 古戀唄3
天を支える者 古戀唄4
天を支える者 古戀唄5
天を支える者 罠は、蜜の味
天を支える者 緑風に誘われ
天を支える者 緑の糸をたどって





〈好評発売中〉 コバルト文庫

二度はないと誓った、この愛が痛い。
前田珠子 〈空の呪縛〉シリーズ
イラスト／明咲トウル

空の呪縛

『針の森』に住む美しい女柱神フィオルシェーナは、恋の誘いを頑なに断り続けていた。それは、過去の過ちを繰り返さないため…。恋獄の楔に絡めとられた女神の愛の物語！

柱神フィオルシェーナの前に、かつての恋人の生まれ変わり、ファナルシーズが現れた。運命が、二人をあざ笑う。



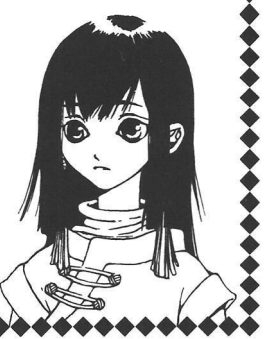
空の呪縛
月の堕ちるとき

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。
前田珠子 〈聖石の使徒〉シリーズ
イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒
其は焔をまとう者
聖石の使徒
其は力を放つ者
聖石の使徒
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ
聖石の使徒
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ
聖石の使徒
揺籃の瞳
聖石の使徒
蒼の組木箱
聖石の使徒
狩人の爪





〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年コンビが暗躍する魔性を斬る!

前田珠子 〈魅魎暗躍譚〉シリーズ

イラスト／田村由美

魅魎暗躍譚

碧眼の少年(前編)(後編)

髪と瞳の色を奪った魔性を探す甲斐。途中、行き倒れの志摩を助けたことから、没落した名家の当主・隠岐と知り合って!?



月乃守家の姫君・遠江(とおとうみ)は美少女だが相当の猫かぶり。偶然異母兄の甲斐と再会を果たすが、魔性の陰謀が彼女に迫り…!?

魅魎暗躍譚

月読見の乙女(前編)(後編)

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／廈門 潤



漆黒の魔性

白焔の罠

柘榴の影

紫紺の糸（前編）（後編）

翡翠の夢1～5

鬱金の暁闇1～3

女妖の街 破妖の剣 外伝①

ささやきの行方 破妖の剣 外伝②

忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③

時の螺旋 破妖の剣 外伝④

魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤

呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

〈好評発売中〉 コバルト文庫

今度は大天狗と知恵比べ!?

炎の蜃気楼邂逅編（ミラージュ）

# 真皓き残響（ましろ）

氷雪問答

## 桑原水菜

イラスト／ほたか乱



冬の越後。景虎（かげとら）たちは、旅の宿に現れた雪蛇の願いを聞くことに。竜神になるための試練として、天狗と知恵比べをするらしいが…？

〈炎の蜃気楼〉シリーズ・好評既刊

炎の蜃気楼邂逅編 **真皓き残響** 夜叉誕生（上）（下）
炎の蜃気楼邂逅編2 **真皓き残響** 妖刀乱舞（上）（下）
炎の蜃気楼邂逅編3 **真皓き残響** 外道丸様（上）（下）
炎の蜃気楼邂逅編4 **真皓き残響** 十三神将
炎の蜃気楼邂逅編 **真皓き残響** 琵琶島姫

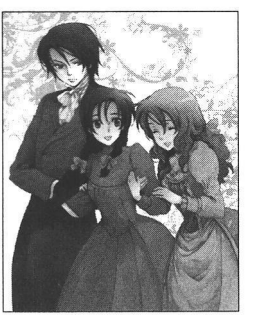
〈好評発売中〉 コバルト文庫

恋のドレスが映すそれぞれの物語。

ヴィクトリアン・ローズ・テーラー

# 窓の向こうは夏の色

青木祐子
イラスト／あき



薔薇色（ローズ・カラーズ）を訪れる人々は、恋の悩みもまたそれぞれ。ドレスが映し出す恋模様とは…？シャーロックの寄宿舎時代の初恋編も収録。

―〈ヴィクトリアン・ローズ・テーラー〉シリーズ・好評既刊―

恋のドレスとつぼみの淑女
恋のドレスは開幕のベルを鳴らして
恋のドレスと薔薇のデビュタント
カントリー・ハウスは恋のドレスで
恋のドレスは明日への切符
恋のドレスと硝子のドールハウス
恋のドレスと運命の輪
あなたに眠る花の香
恋のドレスと大いなる賭け
恋のドレスと秘密の鏡
恋のドレスと黄昏に見る夢

〈好評発売中〉 コバルト文庫

千代菊、「日本髪」をめぐる旅!

# 少年舞妓・千代菊がゆく!

恋する乙女と髪結師

## 奈波はるか

イラスト／ほり恵利織



千代菊の髷を結っている髪結師・匡さんが、最近元気がない。心配する千代菊たちだったが、彼は美容院を閉めて失踪してしまい…?

―〈少年舞妓・千代菊がゆく!〉シリーズ・好評既刊―

**花見小路におこしやす♥**
**その勝負、受けて立ちまひょ**
**恋する三味線**

他24冊好評発売中

〈好評発売中〉 コバルト文庫

早く気付いてくれよ、俺の気持ちに…

# 花咲く丘の小さな貴婦人（リトル・レディ）

それは青いすみれの季節

谷　瑞恵
イラスト／桃川春日子



ヴァレンタイン・カードをめぐって、ジェラルドとケンカしてしまったエリカ。こじれた二人の関係は、エリカの誕生日に新たな局面を迎えて!?

――〈花咲く丘の小さな貴婦人〉シリーズ・好評既刊――

花咲く丘の小さな貴婦人（リトル・レディ）　寄宿学校と迷子の羊
花咲く丘の小さな貴婦人（リトル・レディ）　林檎と花火とカエルの紳士

〈好評発売中〉 コバルト文庫

あなたとならどこへだって行ける。

# 月色光珠

蘭花は大河に舞う

岡篠名桜

イラスト／風都ノリ

長安を離れ船で旅立った有と琳琅。ある夜、船が野盗に襲われ、火を放たれてしまう。琳琅を岸に逃がし、有はひとり船に残るが…？



〈月色光珠〉シリーズ・好評既刊

黒士は白花を捧ぐ　空恋う銀糸の果て　月珠は黒翼を抱き

暁の野に君を想う　冬苑に徒花は散る　秘密の名前

天馬は暗夜を翔る　春宵に灯る紫の光

〈好評発売中〉 コバルト文庫

あの2人、最近アヤシクない？

# グランドマスター！

のこされた神の郷（さと）

樹川さとみ
イラスト／松本テマリ



最近、姫総長シーカとカタブツ団長ハルさんの仲が怪しい。そんな中、慰安旅行を兼ねて向かった温泉は異教の巫女が守る土地で…？

〈グランドマスター！〉シリーズ・好評既刊

グランドマスター！ 総長はお嬢さま
グランドマスター！ 呪われた女騎士？
グランドマスター！ 道連れは王子さま

〈好評発売中〉 コバルト文庫

王宮への献上品は、わたし!?

# 今夜きみを奪いに参上!

－翼のない王－

## 響野夏菜

イラスト／本田たまのすけ



エンゴア王宮に奴隷として潜入したもと王女のイリーシェ。しかし、聖妃の暗殺未遂事件が起き、犯人として投獄されてしまい…!?

――〈今夜きみを奪いに参上!〉シリーズ・好評既刊――

今夜きみを奪いに参上! －紅の宝玉－

今夜きみを奪いに参上! －忘れられた楽園－

〈好評発売中〉 コバルト文庫

凛花が謎の美女に嫉妬!?

# 桃源の薬

白翼山綺談

山本　瑤
イラスト／香坂ゆう



方士のインシェンと白翼山で暮らす凛花。謎の美女に凛花が嫉妬!? シロの悩みとは!? 白翼山の日常を描く人気シリーズ豪華短編集。

〈桃源の薬〉シリーズ・好評既刊

- 桃源の薬
- 桃源の薬 星の杖と暁の花
- 桃源の薬 春風に舞う後宮の花
- 桃源の薬 金雲の彼方　覇王の夢(前)
- 桃源の薬 金雲の彼方　覇王の夢(後)
- 桃源の薬 麗を抱く娘
- 桃源の薬 翡翠色の王国
- 桃源の薬 仙境の女神と黄金の桃
- 桃源の薬 満ちゆく月と双龍の里
- 桃源の薬 遙かなる王宮への鍵
- 桃源の薬 天上の花　永遠の恋

〈好評発売中〉 コバルト文庫

もっと大きな存在になりたい

# 精霊の島のシレネ

恋の花をあなたに

崎谷真琴
イラスト／沙月ゆう



山のふもとのデイン村に、新しい精霊使いがやってきた。村人に迫害される彼をかばったシレネは、イリオと喧嘩し家出してしまい？

〈精霊の島のシレネ〉シリーズ・好評既刊

**精霊の島のシレネ**
上手な家の手なずけ方

コバルト文庫 雑誌Cobalt

# 「ノベル大賞」「ロマン大賞」

## 募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
**正賞の楯と副賞100万円**(税込)

〈佳作入選作〉
**正賞の楯と副賞50万円**(税込)

### ノベル大賞

**【応募原稿枚数】** 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
**【締切】** 毎年7月10日（当日消印有効）
**【応募資格】** 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
**【入選発表】** 締切後の隔月刊誌Cobalt1月号誌上（および12月刊の文庫のチラシ紙上）。大賞入選作も同誌上に掲載。
**【原稿宛先】** 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」（大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円）の対象になります。

### ロマン大賞

**【応募原稿枚数】** 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
**【締切】** 毎年1月10日（当日消印有効）
**【応募資格】** 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
**【入選発表】** 締切後の隔月刊誌Cobalt9月号誌上（および8月刊の文庫のチラシ紙上）。大賞入選作はコバルト文庫で出版（その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします）。
**【原稿宛先】** 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

雑誌Cobaltの発売日が変わります。応募に関する詳しい要項は発売中の6月号、以降9月・11月・1月・3月・5月・7月号（偶数月1日発売）をごらんください。

9784086011822

ISBN978-4-08-601182-2

C0193 ¥438E

1920193004380

定価 本体438円＋税



コバルト文庫